ぶらいんど・そんぐ

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ぶらいんど・そんぐ

【Ｎコード】
Ｎ７４１４Ｇ

【作者名】
遼

【あらすじ】
転校生として学校へやってきた桜木夏美。澄み渡る美しい声をした彼女は僕の幼馴染で、かつてその声を僕は演奏に乗せたのだった。時が流れてからの夏美はきれいで優しくて、それがたとえ恋でなくても他の男が煩わしくなるくらい僕の胸をゆすりたてた。あの日歌った僕らの大好きなあの曲――また一緒に歌っていこうと思うのだ。ただひたすらに希望を歌おうと――

1．夏の訪れと秋の最盛

僕には好きな歌がある。
それはごくありふれた歌詞とメロディで、お世辞にも「オリジナリティ」とかいったものもない、それこそありふれた量産品のような歌だ。それでも僕はその歌が好きなのだ。
何が、何故か、そんなことを聞かれることもあるけれど、そんなときには「声が好き」と答えるようにしている。僕の本音がどこにあるのか、誰も気づいてはくれないだろうけど、そこに嘘はないのだ。
僕には好きな歌がある。
今日も部屋に響き渡るこの歌に身を委ねて、僕は心地よい眠りに落ちていった。

――それでは今宵皆様に、ベッタベタなラブソングをお届けします。
――どうぞ眠りながらでもご拝聴いただければと思います。

――ぶらいんど・そんぐ――

僕が高校二年に進級して早三ヶ月、季節はもう夏に差し掛かった。
蝉が鳴き始めるには早いとも思ったけれど、そんな僕の意にはま

ったく介さず、彼らは今日も愛を求めて歌い続ける。これが求愛の鳴き声で、彼らは地上に出てからの全ての生を生殖に捧ぐと知ったのは、中学に上がってからだった。女の子の中でも多感なあの子は「素敵」とか呟いてたけど、果たしてそれを素敵と呼べる彼女をこそ、僕は素敵だと思ったものだった。

教室を満たす陽気と熱気が僕を思考の海から引き上げる。この喧騒の理由は二つ、もうすぐ来る夏休みと、時期外れの転校生だった。

何しろ夏休み一歩手前、転校してもすぐに長い間の別離になる。勉強の進行に追いつくにはそりゃあ最適だろうけど、宿題でその差を埋めるなんて……僕ならふてくされて宿題は手付かずだ。

男友達の衛が寄ってきて、冷めた僕の肩を気安く叩いた。

「いよう、お前は今度も興味なしか？」

「いや、興味はあるよ」

「ほー。まあ転校生で興味持つなってのが無理な話だわな。それで？」

僕の顔を覗き込んでにやにやと笑う衛。相当に憎たらしい面なのに、どうしてか憎めない性質だから厄介だ。

「女？　男？」

「んー？　……やっぱり女の子だとうれしいかもね」

「だろうな！　いやー、珍しいな、お前が本音トークとは！」

「そりゃ、たまには」

彼はにやにや笑いを止めようともせず僕の肩を何度も叩いた。

彼がそう言う理由というのは、僕に恋人がいたためしがない――というレベルでなく、恋をしたことがないという事実を指してのことだった。

別に女の子に興味がないわけじゃない。そろそろ性徴も現れて、胸も膨らみ色気も次第に増してくる女の子にこれだけの距離で囲まれているのだ、僕だって異性を意識しないわけがない。ただ……ただ、下品な言い方をすると、股間はうずいても胸はうずかないのだ。

こういうと「ピュアだな」と言われる。初めては好きな人と、た

だそれだけの言葉だ。
「お前の好みって何？　舞子ちゃんみたいな？」
「舞子は関係ないでしょ。妹だし」
「かわいいからさー、あれを基準にしたらそりゃーお前、どの女も基準みたさねーだろ」
「まあ、舞子はいい子だと思うけど……けど異性の基準にはならないでしょ」
一つ下の妹の笑顔が脳裏を過ぎって、すぐにため息に変わって身体の外に出て行った。
「ああ……逆に言うと、あの子がいるから出会いがない、と」
「察してくれてうれしいよ」
「言うな親友」
親友に理解があってうれしい限りだと苦笑いを一つ。
彼はその後馬鹿笑いを二度ほどこぼして席へ戻っていった。
木製品ばかりが目に付くこの教室に、あせた制服を焼く陽光の匂いが満ちている。黒板の文字はその光にかすれてほとんどは見えない。
熱いけれど眠気を誘う。

僕が目を覚ましたのはその声を聞いたからだった。
「桜木夏美です」
その後の言葉は一切耳に入ってこなかった。名前と声があまりにきれいで――
要するにそれが一目ぼれ、人生初の恋、叶わないと有名な初恋だった。それが果たして桜木さん個人かその声か、どれを対象にしたものかわからなくなるくらい、遠く澄み切った可憐な声だった。
席は僕の後ろで、窓際の一番後ろだった。がたりがたり、「よろしくねー」笑い合う声が聞こえる。
僕の背中が何かにつつかれたのはその後だ。振り返る先に女の子の顔がある。

「よろしく柏原くん」と笑う彼女――桜木夏美。
「よろしく」とこぼす僕――柏原舞。
とてもつりあうものじゃない点対称な僕らがそこにあった。
僕の初恋は、高い高い崖の上、そこに可憐に咲く花から垂れる一本の絹糸であると、僕は悟った。

桜木さんの隣の席には、野球部のファーストにおいてレギュラーの座を一年生で勝ち取った風祭だ。僕と席が近い関係もあって、彼ともよく話すけれど、とても気さくでバイタリティの高いいい男だった。嫉妬する感情さえ起きない。
桜木さんもよく笑った。授業中彼と一緒に注意されることが、転校初日で三回だ。それを笑う二人は既に恋仲なのではと思うほど感じがいい。それは予定調和のようでもあり、彼への感情と同じく、嫉妬する気さえ起きなかった。
彼女は僕の背をつついて笑った。
「注意されちゃった」
ちょっとだけ振り返り、僕は言う。
「また注意されるよ」
彼女は笑う。
「そだね」
それが僕らだった。
彼女はその私語で回答を指示され、黒板の前に笑いながら向かっていく。揺れる茶色の長髪が芳しさを運ぶ。さらりと流れる風のようでもあり、教室ににわかに清涼感が生まれた。
彼女はその問題に難なく答え、また席に戻る。風祭とまた何か話したようだけど、あまり小声すぎて僕の耳ではうまく聞き取れなかった。頭がいいとかそんなところだろう。
まったく、嫌になる。こんな風に聞き耳立てるなんて卑怯な真似したくはないのに。ただ彼女の声がいつまでも聞いていたかった。

それがたとえ僕以外の男にささやく愛の言葉であってもだ。ただその風を感じていたかったのだ。風祭はその坊主頭をかいている。音がそう教えてくれる。
また背中に彼女の指。すぐそれとわかる。
「どうかな、わたし勉強は自信あるんだ」
ちょっとだけ振り返り言う。
「勉強、進度そう変わらないみたいだね」
「うん。ちょっと安心しちゃった」
「風祭も勉強はできるよ。部活続けるために頑張ったんだって」
「うん、ちょっと教えてもらった」
僕はちょっと面白くなくて、「注意されるから」とまた前に向き直った。
今度はちょっと会話が続いた。感情が二つ絡みあって、僕のノートをぐしゃぐしゃに汚した。

夏休み前の終業式に出席するという常識を、僕は始めて破った。どうしてとかそういうのはなく、ただ面倒だったのだ。風祭との距離を次第に縮めていく桜木さんは、列順から僕の隣。近づいて、その視界に入れたくなかった。入りたくなかった。まったく嫌になる、嫉妬してないと思っていたのに。
これは嫉妬だろうか？　彼女の指を背中で思い出して、そのくすぐったさに頬を緩めてみた。これは恋とかそういう類の妬みじゃなくて、彼女の声を独占する彼への妬みなのだ。そういうことにしておこう。
一目ぼれって物語の中だけかと思ってた。
一耳ぼれって言ってもいい。小説で過剰に華やかに書き立てられるだけの、ただのエッセンスだと思っていた。
事実それは極上のエッセンスだった。日常を彩る最上の要件だった。
体育館から出てその裏の林へもぐった。終業式であるという以前

に、元々が墓地を埋め立てたところだということもあり、ここは人が来ない。そんなもの怖くもなんともないのに。たたりなんてありゃしないさ。
いや……日頃ここに出入りしてる僕へのたたりが、彼女なのかも。小説だと――と思っていると、彼女はそう、不安げ首を回しながら歩いてきた。僕を見つけたその顔がぱっと輝く。
「不良さんみつけた」
「やあ」
背もたれにした木をこするように手を挙げると、彼女もそれにならうかのように手を挙げた。
「何しに来たの？」ときくと、彼女は数メートル離れた向かいの木に同じように背を預けた。
「転校生だから今のうちに学校見て回りたいって言ったら、許してくれたよ」
「うちの担任はルーズだからね」
「思った」くすくす……梢が揺れる。
仄暗い林にレース編みに透かしたような陽光がまじりこむ。雑草はそれでも生い茂っていて、僕らの尻や腰を守ってくれた。
「きれいなところね」
「元墓地だよ。静かなのもそのせいかも」
「墓地ー？　なんで墓地が林？」
「さあ……学校に緑を植えるところがなかったからかな」
「ああ、グラウンドはそういうのなかったね」
「練習の邪魔になるからってさ。野球とラグビー、強いんだ」
そういえば全国にも言ったらしい。
「甲子園行ったって、風祭くん言ってた」
そりゃあもてて当たり前だ。テレビのなかで汗を流す彼は男が見ても惚れるようなレベルだ。僕の流す汗と彼のそれとじゃあ、それこそ飲み水と泥水ほどの差がある。
そんなことを思って笑うと、目の前の桜木さんもまた笑った。何

を考えてるかはわからない。
「もうすぐかな。甲子園」
「かな。桜木さんは応援とか行くの？」
「行くかも。来てって言われちゃった」
本気かな、これは。
「ねえねえ、その」
「ん？」僕に話しかけるその表情がちょっと面映くて、僕の返事は少し間が抜けた。それを笑う彼女を見て、僕も笑った。
「なにかな？」
「桜木さん」
桜木さんは自分の名前を呼んだ。
「桜木さん」
繰り返し、三回ほど。
その意を測ることができなくて、僕は苦笑いをこぼすことしかできなかった。彼女は怒ったように睨むばかり、真意を語ろうともしない。そのまま過ぎる無言のとき――梢がそれを埋めてくれたから、僕には何の苦痛もなかったけど。
しかし彼女にはそれが苦痛だったらしい。痺れを切らしたように口を開いた。
「夏美って呼んで？」
「え？　でも」
「ね？」
かわいらしく小首をかしげて、彼女は笑う。真意はやっぱりわからない。だって風祭だってまだ「桜木」だ。それを僕なんかが名前で呼んでいいわけがない。彼女はまだ僕を睨んで、その声と視線で僕を縛って離さない。視線が苦手な僕は、それに辟易するように顔を背け、手元の雑草を無意味に引き抜いた。風にさらすと音が鳴る。
「ふう……」やがて別の音が聞こえたと思ったら、それは彼女のため息だった。
「嫌なの？」

「嫌じゃないよ」
「じゃあ呼んで？」
「でも風祭は」
「んーとね、風祭くんには、名前で呼んでほしくないな」
不可解な言葉だと思う。さあっと吹き抜ける清涼な風はとても夏のそれをは思えず、彼女の言葉を忘れるように目を閉じ身を委ねた。
「嫌？」
「何が？」
「仲良くしてるの、風祭くんと。嫌？」
「嫌じゃないよ。だって恋人じゃないじゃない」
「恋人じゃなくても、嫌なものは嫌じゃないかな。例えばー……好きなアイドルが結婚したとかで騒ぐ男の子」
「桜木さん、アイドル？」
「むー……ああ言えばこう言うんだからもー」
閉じた目にもむくれた顔が映った。この林には何もないから、彼女の存在はとても鮮やかで感じやすいのだ。声も同じで、とても鮮烈なままに耳に届く。
「それで」
「うん」僕から話しかけたのが意外だったらしい。声がかすれていた。
「学校、回らなくていいの？」
「案内してくれるなら回るよ」
「うーん……」
僕は少しだけ気が進まなくて返事にためらう。そうすると彼女もまた無言になって、また風の鳴る音だけが僕らを包んだ。
夏のこの場所は特に好きだ。涼しいのもあるし、湿った空気に揺れる梢の風音は、冬の澄んだ空気に鳴るよりもずっと重厚で奥深い。日光浴であれ沐浴であれ、それは太陽がその存在を誇らしげに見せ付けているからこそのものだ。
歌が聞こえた。

目を開ける気すら起きなかった。
心地よい歌が木漏れ日なのか風の音なのか、あるいは草のざわめきなのかもわからなかった。
ただ心地よくて、僕はその希望の歌にただ身を委ねて、眠りに落ちるのだった。

――――――――――――――――――――

甲子園が終わり、我が校の誇る野球部は三回戦まで駒を進めることができた。御の字だということらしいけれど、風祭が流した涙を僕のクラスでは誰もが忘れられずにいる。球場は暑く、また熱く、チアや応援団の華やかで猛々しい歌が白球の音をも掻き消して燃えていた。
風祭は休み明けの教室で笑っていた。次に向けて頑張るらしい。桜木さんはその決意を聞いてまた笑っていた。
僕と桜木さんの秘密の場所での秘密の会合は、ささやかな歌と演奏を加えつつもまだ続いていた。
「今日は何を歌おうか」
「秋になるし、ちいさい秋でも」
「りょーかいー。じゃあいつもどおりハーモニカお願いね」
「うん。ちょっと力不足だけどね」
それには返事もせず、僕の前奏も待たず、桜木さんはすぐに歌い始めた。
小さい秋見つけた。
僕はその銀色のハーモニカに歌を吹き込みながら、何もない林を

見渡してみた。この元墓地にあった無数の骨から全てを奪いつくしたような、鮮やかな黄色。そして赤、橙。小さい秋どころか、もう既に冬の足音すら感じられる、燃え尽きそうなほどの色がそこにある。

彼女の歌声はそんな寂寥感を全て打ち消すような楽しげなものだった。燃え尽きてもなおこの世の全てを謳歌しようとせんばかりだ。力強くまた華やかで、秋という季節を音に変えたような声だった。途中、ハーモニカが口から離れた気にすらなった。

やがて音がやむ。梢と草葉の盛大な拍手に、僕と桜木さんは面映く笑った。

「わたしの歌に付き合ってくれる人、柏原くんで二人目」

「僕以外にもいるんだ」

「んふふ……いないよお」

また不可解なことを……まあそれも今更だ。僕は笑った。

「そういえば」

「うん？」

「柏原くんのこと名前で呼ぶ人、いないねえ？」

「うん……あんまり好きじゃないんだ」

「へえ？」

「理由はないよ」と笑うと、彼女もまた笑った。笑ってばかりの二人がまたおかしくて、どんどん後から後から、笑いが溢れてきた。箸が転がっても、っていうのはこういう状況のことを言うんだろう。何がおかしいのかもわからないくらいおかしかった。

ひとしきり笑って、僕らはまた葉擦れの音に身体を溶かした。

「舞」

「ん」

「ひさしぶりだね」

「うん」

回顧は一瞬で、その邂逅もまた一瞬だった。

僕らが出会ったのはどこかも知れぬ小高い丘の上だった。父さんの単身赴任先へ遊びに行ったとき、ふらりと立ち寄っただけだった。

肌身離さず持ち歩いていた、父さんからの贈り物。銀色でつやつやした箱がハーモニカという名前なのは、父さんが笑いながら教えてくれた。息を吹くだけできれいな音が出ることにいたく感動して、成長するとメロディーを奏でたいと思うようになった。

丘の上は音響設備もない。何も反響しないから、音はすぐに空へ消えていく。

だからよかった。音が空気に吸い込まれていくその感覚は、そうそう忘れられるものじゃない。

そんなときに、それに合わせた歌を歌ったのが、桜木夏美だった。

「こんにちは！」

彼女は演奏が終わったあとにそう笑った。快活な少女だった。

「こんにちは……」

僕は変わらず陰気なままだ。音だけが僕の代弁者であり、また本音でもあった。今思えば社交性が身についたのもこの子のおかげだろうか。

なんのことはない。子供心に一緒になって、一緒に演奏をしていただけなのだ。

また会おうねと心ばかりの約束をして、僕は地元へ帰った。それきりだった。

――――――――――――――――――――――――

「忘れてるから、と思ったらくやしくて」
「どうして思い出したって思ったの？」
「身体をこうやって葉っぱの音に揺らしてるとさー……すごくあの日のことが浮かぶんだ。あの日一緒に歌った歌」
僕は何も言わずにハーモニカに口付けた。彼女が求めるその歌は、たぶんグリーングリーンだ。
あの歌は、僕らが出会ったその日、僕が一人演奏していた曲だった。この丘にぴったりだと思ってそうしていた。青空には小鳥が歌い――ああ本当に爽やかで楽しい気分だったのに、幼い彼女はそれをぶち壊してくれたのだ。
グリーングリーンには色々な解釈がある。オーソドックスな戦争の歌というもの、パパとママが離婚するというもの、その他諸々だ。あの日の彼女は前者を揚々と話して聞かせ得意げになってたけれど、僕はその話を聞いてがっかりとしたものだった。だってそうだろう？　気持ちよく歌ってた歌が、よもや戦争の歌だったなんて。
「すねちゃってね」とまた笑う。意地悪い笑みだ。
「仲良くなるのに無駄な時間を使っちゃったんだなーと思うと」しかしその笑みをすぐかき消して、今度はとても柔らかに穏やかに、和やかに微笑む。高鳴る鼓動を否定もせず、僕はそれに見惚れた。
「ちょっと惜しいことしたかなって」
「そうだね。もっと色んな歌、歌ってたかも」
「んふふ。でもまたこうして会えたから。またたくさん歌うんだ」

彼女は楽しそうな顔ばかりしている。この秋に舞う極彩色の木々のようだ。
たとえ朽ちると知りながらもその生を謳歌せんとする、その儚い木々のようだった。

――――――――――――――――――――

大変なことが起きたと血相を変えたのは親友の衛だった。事の顛末はこうだ。
「お前がどこに行くのかなんざ俺の知ったことじゃないけど、舞子ちゃんにとっちゃそれは大事なだいー……っじな問題なんだわかるな？　わかれ。よし続けるぞ。まあ最近授業やら何やらを抜け出すことが多くなったお前を不審に思うのも当然だな。当然だ。あとはわかるな？　わかれ。そういうことだ」
らしい。
要するに舞子が僕を尾行して、夏美と一緒にいるところを見たということだろう。
「それは……昨日、ちょっと怖かったかも……」
「だろう。あの子、桜木に噛み付くぞ。比喩でもなんでもなく」
「怖いこと言うなよ……」
「何の話かな？」
僕と衛のこそこそ話に乱入してきたのは、当の夏美だった。

「桜木さんはこいつに妹いるの知ってる？」
「ああ、うん聞いたよ。すごくかわいいんだって自慢してたの覚えてる」
「ほう……」
にやりと笑う衛のすねを蹴っておいて、僕は話を逸らそうと話題を戻した。
「あー……そういう子だったんだ」
「まあ、親愛とかそういうの、履き違えてるだけだけど」
「んー、まあどっちでもいいけど。でも、舞といられなくなるのは困るな」
その言葉に頬が熱くなると同時、苦痛に悶えていた衛が突然の復活。からかうような目つきはさっきとまったく変わらず、今度は対象を夏美へと向けた。憎たらしいのに～ってのは、もう撤回しておこう。
それでも笑いながら、夏美は彼の追及を軽やかにかわしていく。なんとなく残念な、なんとなく安心したような、まあ思春期なんだと自己完結してから窓を見た。
そこに映る景色はまだ秋のものだ。冬になるのが早いとはいえ、この極彩色の風は衰えることも知らずに僕の耳に、目に届く。音階なんてものもわからないし、これがどういう音だか形容する術を持たない僕だけど、これが何よりも美しい音色だと思うのだ。
僕の大好きな歌。数え上げればきりがない。
「まあ、夏美ちゃんをからかうのは無駄だとわかった」
「ふふふ……好きって言うとき、好きって言う人、もう決まってるからね」
いたずらっぽく笑って、夏美は心地よいため息をこぼした。
蚊帳の外の僕を無理やり引っ張り、
「舞はいないの？」
「ん？」に答える「好きな人」
んー、と今度は思う。

「恋愛感情って、まだわかんないから」
「そか。舞らしいといえば、舞らしいかもね」
「そうそう、こいつ、今の今まで誰かを好きになったこともないっつーんだから、もう哀れとしか言いようがない」
「そうかな？　誰かを好きにならなきゃならないって、そんなルールないよ？」
夏美はいつも笑っている。
何を笑っているのかよくわからないけれど、ずっと何かを笑っている。それとも対象なんてなくて、ただ微笑んでいるだけなんだろうか。
「人として女――」と続けようとした衛の顔が凍りついた。
夏美がその笑顔を崩していたからだ。かといって怒っているわけでも、悲しんでいるわけでもなさそうに見える。僕は――
「恋愛なんて動物皆やってることだよ。女好きは猿でも同じさ。人としてってのは――」
「人としてっていうのは、自分の想いを色んな手段で伝えること。愛情だったり――」
「――音楽だったりね」
息を合わせたように僕らはため息をつく。
茶化すような空気ではないとわかってるんだろう、衛は「悪かった」とだけ言ってまた笑ってくれた。こういう機転は、うらやましくなるくらいにいい男なのだ。正直なところ、なんで彼女の一人もいないか理解できないくらいに。
こんな僕に、何年も飽きずに付き合ってくれている。優しい男なんだ。
夏美はけれど、変わった空気についていけなくなったようだった。足早に教室を後にした。
「なんか触っちゃったみたい……かな」
「かもね」
「追わないのか？」

「気になるなら行ったらどう？」
「馬ーっ鹿」
行けるわけないか。そりゃそうだ。
僕は夏美の行く場所へ向かう。当然だろう、夏美ならあそこにいるに決まっているのだ。

――――――――――――――――――――

歌が聞こえていた。

つらく悲しい時にも　泣くんじゃないよと
グリーン　グリーン　青空には　そよ風ふいて
グリーン　グリーン　丘の上には　ララ　緑がゆれる

夏美は僕らの大好きなグリーングリーンの二番をちょうど歌っているところで、僕は三番が始まる前に夏美の前にたどり着いた。さっきまでの胸のつまるような表情は消え、穏やかな風景と同じになったような安らかな顔をしていた。
つらく悲しい時にも、泣くんじゃないと、そう言い聞かせているのかな……？　今まで歌っていた歌詞になぞらえてそう笑うと、夏美は微笑んだ。

「人としてってなんだと思う？」
「ん？」
「人にしかできないことをすることが人としてじゃないよね。ただ欲求を満たすのも違うよね」
「そうだね」
不可解なのも今更、僕はうつむいて大人しく聴いていることにした。この声はそう、切ないバラードのような気分にさせてくれる。
「当たり前のこと、できないと、そうじゃないのかな」
「それは……どういう？」
言葉の端に不穏な空気を察して、僕はうつむいていた顔をすぐに上げた。
すぐ近くに夏美がいた。目の色まで見えてしまうほど、吐息の味までわかりそうな距離だった。
「舞の顔、見てるの」
「うん……それはわかるけど」
照れる……とは、言えそうになかった。夏美の目が少し潤んでいるような気がしたから。僕にできるのはいつだって同じ、夏美の歌を聴くことだけなんだ。歯がゆいけれど心地いい、僕の居場所。
ただ、夏美はその距離を縮めた。唇の味までわかる距離まで。
「夏……美？」
それを離した後の言葉はかすれていた。まだ息のかかる距離にいて、夏美は胸を押さえて目を閉じて、その余韻に浸っているようだった。
「舞、わたしには、当たり前のことが当たり前にできなくなるときが、必ず来ます」
「え――」
「そのときにまたキスをしてくれますか？」
僕の言葉がどんなものだったか、よく覚えていない。
ただ確かなことは、夏美が柔和な泣き笑いをしていたということ

だけだった。

つづく

2. いまじね

2. いまじね

「そこに立って、うんそう、そこから右にちょっとずつ動いて欲しいの」

夏美はあれから少しばかりぼうっとした後、突然に僕に「お願いがある」と言ってきた。そうしてその指示だ。戸惑うところもあったけど無下にできるわけもなく、僕は夏美から五メートル先に立ち、少しずつ右に動いていった。少しずつ少しずつ、半歩ずつだ。

「もう少し、うん。あと二歩」

たん、たん。少しだけ力を入れて地面を踏んだ。そうして夏美の方へ向き直るが、彼女はさっきのまま、僕の元いた場所を見つめていた。そこには草木しかない、ただの虚空だ。

「でね、わたしが舞と同じだけ動いたあたりを見て」

言われたとおりにそこを見る。たかだか二、三メートル歩いたところで何かが変わるわけもない、そこには草むらと木々、空と夏美が映されている。きっと夏美が見ているものと同じはずだ。彼女は何が言いたいのだろう……？

視界の隅の彼女は何も言わず動かない。まるで、まるで……

「舞はわたしが見える？」

「う、うん」

まるで、そこに何もないかのようじゃないか。

「わたしには舞が見えない。そういうことなんだよ」

――ぶらいんど・そんぐ――

僕の一日はまず妹を起こすことから始まる。何しろ寝覚めの悪い妹で、叩いてもつねってもただじゃ起きやしない。昔から眠ることだけには執着して、僕の言うことを聞こうとしないのもこのときだけだ。女の子らしくないというと偏見かも知れないけど、白い壁紙に黒や白の家財、モノトーンで統一した部屋の隅にある、同じく黒いパイプベッドの上の白い布団で安らかに眠る我が妹。寝顔はそれでいて整ったままだからたちが悪い。

僕はカーテンを開けた後にその枕元へ近づいて、まずは呼びかけてみた。

「舞子、朝だよ」

すー。

返事はそれだ。ただの寝息とも言うけど。

「朝ごはん冷めるよ」

「……うん」

冷めてもいいらしい。といったものの本当に冷めてると「なんで起こしてくれないの」だからまったく……仕方のない妹だと苦笑いをこぼすが、まあ悪いものじゃない。頼られてるのか甘えられてる

のかは知らないけど、何しろかわいい妹だ。この子のせいで出会いがなくなっていようが、彼女から離れない限りは一緒にいるんだろう。

布団越しにその華奢な体を揺すると、舞子はそのきれいなソプラノでううんと呻いた。目覚めが近いようだ。朝日も眩しいし、放っておいても起きる頃合だ。

「舞子」

「ん……うん」

目を瞬かせて、舞子はようやく目を覚ました。まぶたをこすってあくびを一つ、上半身をそっと起こす。ピンク色のややだぼついた、ルーズなパジャマ。これが舞子のお気に入りだ。

「おはようお兄ちゃん」

「おはよう。ご飯できてるって」

「うんすぐいくぁあぅ……」

あくびくらい、喋り終えるまで我慢しなさい。ため息をこぼすも舞子は笑うばかりだ。

「待っててね」

「わかってる」

彼女を起こしてから朝食をとる理由はまさにこれ、彼女が「待ってて」と言うからだ。甘えたい盛りはとうに越え、それでも僕が先に出かけると決まって怒り出す。一緒がいい一緒がいい、耳にたこができるくらい聞きなれた言葉だ。

苦笑いを残して部屋を出てすぐ、舞子の様子が変わったのを感じた。

朝日も奇ばしい午前七時、僕と舞子は兄妹そろって学校へ向かう。閑静な住宅街のはずれにある僕らの家からは、学校は少し遠くにある。だからといってこんな時間に出る必要もないのだけど……まあ要するに舞子たっての要望だったのだ。騒がしいのが嫌いな子だから。

北からやってくる風がまだ続く旅路の中、気づかぬうちに僕らを撫で去っていく。この冷酷さはきっと北から持ってきたものだろう、僕と舞子は揃って身震いをする羽目になった。目覚めたときには散っていたその長い黒髪も、今は後ろで一つにまとまって艶やかに光っている。風に揺れる様はまさにポニーテール、走る馬のしっぽのようだ。

「寒いね」

「うん。でも舞子、すごい長いマフラーだね」

「んふ。いつかやりたいって思ってたのっ」

その言葉に全身を駆ける「いやな予感」。それほどよく当たるものもない。

「断る」

「まだ何も言ってないじゃないっ！」

言わなくてもわかるというかわかりたくないけど……

舞子はぶーと膨れながら僕を睨む。前に見た夏美のように、そこには確かに期待が乗っかっているとわかる目で。それでもそれは勘弁して欲しい。だって一つのマフラーを二人でなんて、馬鹿なカップルだって敬遠する。

視線だけで言って聞かせると、今度は本当にむくれてしまった。

「お兄ちゃんケチになった」

「モラルを身につけたって言ってね」

「けーち」

僕のほうを見ようともせず一歩前を歩く舞子。都合が悪くなるといつもこうだ。甘やかしてきたのが原因と思うとそりゃあ反省もするけど、けれどどうしてか彼女には厳しく言う気になれない。

ゆらりゆらり、ポニーテールが風に揺れて香りを散らす。後ろ手を組んで足早に僕の前を行く舞子は、それでも一定以上離れようとはしなかった。

「舞子、先行っててていいよ」

足が止まった。振り返る舞子の顔は無表情に歪んでいた。

「いや」

「怒ってるんでしょ？　マフラー一緒に巻くなんて、これから先もしないよ？」

「それよりずっと、先に行かれるのはいやなの」

泣こうとも怒ろうとも、もちろん笑おうともせずに舞子は僕の目を見て言い放った。「先に行くのが」じゃあなかったのはきっと……

彼女にも彼女なりの事情がある。夏美や僕にもだ。ただ僕と彼女の個人的な事情というものが複雑に重なり合った結果がこれなのだ。深い依存心が彼女に根付いて、僕はそれを正すこともできなくなってしまった。

「手つなぐくらいいいよね？」

「ああうん、それくらいなら」

もうすぐ冬だ。舞子の手は小さくやわらかく、また温かかった。

風祭と夏美もずいぶん仲良くなって、朝は大体隣同士でしゃべりあっていた。僕はそれに挨拶だけを投げかけて席について机に顔を伏せ、朝のＳＴが始まるまで寝たふりをするというのが常だった。
「いつも寝てるね」という夏美の疑問には「ちょっとね」とだけ答えてだ。
だけどもあの日から夏美は、風祭との話をどれだけ中途半端であっても切ってしまうようになった。それで僕に話しかけてくるから、風祭の視線も次第に冷え切っていくのを感じていた。
けれどもそれを無下にできるわけもなかった。夏美の事情を知ったからこそ。妹といい夏美といい、ただ僕が甘いだけかも知れない。けれどけれど……どう積極的に動けと言うんだ。
「おはよ、舞」と笑った夏美。
僕は風祭を一瞥してから席について、後ろを振り返った。風祭もさすがにこの間に入ろうとは思わないらしく、視線はすぐに感じなくなった。
「仲いいんだね、妹さんと」

「まあそうだね。甘えん坊だけど」
「すごく凛々しい子なのに」くすくすと戯笑をこぼす。
まあ否定はしない。釣り目がちで唇は薄くきゅっとしまっていて、上背もあるからかとても大人っぽくは見えるのだ。実際クラスではそういう位置づけらしい。ただ――
「ブラコンなんだよ、僕が言うのもなんだけど」
「うんうん、聞いた。わたしも嫉妬されちゃうね」
笑えない冗談だと笑う。
この声だ。鈴を転がしたようなという比喩よりももっとかわいらしい、そしてもっとずっと澄み切った笑い声。僕はこの声に惚れたに違いなかった。夏美と出会ったあの日にも、きっと僕はすごく楽しく歌っていたはずなのだ。差し込む朝日に照らされた夏美の頬に揺れる産毛が、さらさらと透明になって僕の目に飛び込んだ。
ふわふわと柔らかそうな頬だ。知らず知らずのうちに伸ばそうとしていた手を、僕は夏美の机の上で止めることに成功した。
「ふふ」
けれども彼女にはそれがわかってしまったらしい。何も言わずにいてくれるあたり夏美らしい。
「いざとなったら、舞はどっちをかばってくれるのかな」
「ん……正直、わかんないよ」
「んふふ、ほんとに正直だねえ」
いつも楽しそうなのも夏美だ。
けれど例えばそういう状況になったとして、僕はどちらも傷つけずにいることができるんだろうか。舞子の気持ちはわかっている――それは本当にただの親愛なのだ。家族に対して抱く過大な愛情、それを抱えきれずにいるだけなのだ。じゃあ夏美は――？
そりゃあ好きでなきゃキスなんてしてくれはしないだろう。瑞々しくて少し甘くて、柔らかくて温かくて、脳が蕩けそうな快楽がそこにあった。好きでなきゃこうは思えない。
「んとね、舞」

「ん」僕の頭の中を見透かすように顔を覗き込んでくる夏美に、少したじろいだ。
「迷えばいいと思うよ。そうじゃなきゃ、その場で思ったことを口にすればいいんだよ」
「そんな、刹那的な」
「そんなものなんだよ。今の積み重ねが人生、未来は今の次の今」
「……わかんないな」
「明日には目が見えなくなるかも知れない」
「……！」
小声だったのは隣に聞かせないためだろう――けれど驚き目を見張る僕に、夏美はからかうように微笑みかけた。どうしてそうやって笑えるの？
「だから、わたしはわたしのやりたいようにやるしかないの」
「……うん」
「クラスの注目浴びるのも、いらない嫉妬をもらうのも、構ってられない。そんなの気にしてたら、幸せな一瞬を逃しちゃうかもしれないもの」
「ずいぶん強引……だね」
「ふふ。舞の気持ちくらいわかるもの」
そりゃあたいそうなことでと呆れると、夏美はまた楽しそうに笑った。
でもそうなのだ、彼女は僕の気持ちを理解しているんだと思う。僕が何を思い何を為そうとしているかわかるような行動ばかりとっている。どうしたらどうしたらと僕の先を行っているような印象を受けるのだ。
よく言えば慧眼、悪く言えば生き急いでいる。
仕方ないと納得できるだろうか。僕の目をまっすぐに見つめて笑う夏美の表情にかげりはない。「今」この「一瞬」を生きようとするならこうでなくてはならない。ただ――
「今の幸せのせいで、次の幸せが壊れるかもしれない」

「舞」僕の言葉に、夏美は声を落とした。
「わたしの幸せはわたしの幸せを壊さない。壊れるのは他の誰かの幸せなんだよ」
愕然とした。
――だが、その腹の底から響くような不気味な音色は、ある種の神秘性を持った狂気の産物――まさしく音の奇跡だった。酷く惹かれた。
僕は周りの歓声や中傷、揶揄を気にも留めず、近づいてきた夏美の唇を自ら進んで受け入れていた。

――――――――――――――――――――

夏美と僕の関係はそれから瞬く間に隣の教室にまで知れ渡り、挙句には僕の知らない生徒までもが僕をからかうようになっていた。そりゃあ教室でああまでしたのはまずいとは思うけど――仕方ないじゃないか、彼女がどうしようもなくきれいだったんだから。
それからというもの夏美は人目をはばかることもなくなった。照れる僕をからかうこともなく、ただひたすらに僕の傍にいてくれた。ただ変わっていないことは、林で奏でる美しい音色だけだ。一際

大きな杉の木を背もたれに、僕らは肩の触れ合う距離で音を奏でていた。今日も変わらぬ緑の丘に潜む決意の歌。
「この「僕」って、どう思う？」
「んー、まあごく普通に、立派だなあと」
「そか。ふふ、舞らしい」
「そういう夏美は？」
「ん？　少し悲しいと思う。この歌って「結局生きていくしかない。それなら」って歌ってるっみたいじゃない。それが少し悲しい」
「でも」
「うん、でもそれが真実。だから少し悲しいの。わかるかな」
わからなくもない。けれどわかりたくもなかった。
父親と離れ離れになった「僕」が涙を堪え年月を経て、いつか自分も見ることになる夢を語っている。
「家族がいて、人はまわってく」
「そりゃあ丘はあって当たり前」
「うん。でね、見渡す限りの緑がその先にあったとして――」
夏美は僕らの林をぐるりと見渡した。たぶん僕の半分の視界しかない彼女では、頭を回しても見える範囲は精々だろう。僕もそれにならってみる。
「見渡す限りってなんだろう？」
「その場所にいて見えるもの、かな」
「じゃあ私には半分しか見えない。だったら――」
「そういう風に生きてきたんだ」
じゃああとは身体を動かしてぐるりと回ってみるしかない。気になったものに走り寄っていくしかない。夏美はそうして生きてきたのだ。
「でもいったん気になっちゃうと周りが見えなくなっちゃう。直したほうがいいのかな」
「そうだね……多少、急ぎすぎてる気は」
「余裕ができたんだよ」

「え？」
「欲しかったものが――人がね、当たり前みたいにわたしの隣にいる。走ってたらこっちから逃げてるみたいで……だからちょっと余裕ができたの」
　目的を果たした後の空虚感。高校受験を終えてからのあのときのような感覚。高校受験なんて次の目標を定めてからする人なんてそういるものじゃない、僕と夏美のこの場合もそうだ。「付き合いたい」、「一緒にいたい」――じゃあその先は？　一緒にいる僕らには、この先はないのだ。
　ざわりと騒いだ梢を、夏美はその空気のように視界にとらえた。流れてくる彼女の髪の香りを鼻腔に貯えてから僕もそれにならってみる。
「教室の中の人たちはみんな」その葉擦れをかき消すように、夏美はぽつりと呟いた。
「子供みたい。笑ってばっかり、話にも中身がなくてスカスカ」
「うん」
「それを冷めた目で見て、大人ぶってるいやな子供」
「一緒になって笑ってるじゃない」
「楽しくないよ。何があんなに楽しいか全然わかんない」
　僕はそれに応えることができずに空を見つめたまま押し黙った。夏美もそれ以上何かを続けようとはせず、僕の体温を感じながらただ空を見上げる。
「小説とかさ、「普通に扱って欲しい」ってよく言ってるじゃない」
「……それは」生活をする上で何らかのハンデを持った人たちのことだろう。
「わたしのこと、普通に扱える？」
「ん、まだ普通だけど」
「いずれ無理になるよね。当たり前だよ、誰が何と言おうと、周りにが気を遣うだけの理由があるんだもの」
「うん……でも」

「だから遠慮するか……それかせめてうーんと、かわいがって欲しいと思うんじゃないかな」
夏美の身じろぎを感じて、僕は視線を戻した。僕の肩に乗る小さな夏見の頭は芳香を上げ、さらさらと流れ落ちる髪は僕の膝で柔らかく散っている。夏美の体温を感じる。
「見えなくても見えるものがある……これにはもろ手を挙げて賛成したいと思うな」
こういうときにどうしたらいいんだろう。女の子と触れ合う経験なんて、サンプルが実妹しかないからよくわからない。ただ「見えなくても見えるもの」っていうくらいだからきっと――触れ合うとかそういうことなんだろう。
夏美が僕のことをわかってくれるように、僕もまた夏美のことが少しずつわかってきた。人当たりのいいわがまま娘――自分の幸せが一番だと豪語する人。
「僕といるときは、あんなふうには笑ってくれないね」
「んふふ」これでいいかとでも言うように微笑む夏美の顔が、僕の目と鼻の先にある。
教室で「ばか話」をしているときには、本当に楽しそうに笑うのだ。馬鹿を素直に楽しめる年齢だし、僕らはきっとそう在るべきなのだ。
「恋は熱病、愛は盲目だよってね」
「なにそれ？」
「昔からあるたとえ話。今しか笑えないばか話で盛り上がれる人と、愛が育めるかな」
なるほどと納得するけども、……いや、照れるんだ。
「きっとわたしの視界が黒く染まったときに、舞がわたしに抱いてたものがなんだったのかわかる」
「今は熱に浮かされて、何を聞いてもまともには返ってこないって？」
「理解が早くて助かるよ」

その話をするということは、少なくとも今僕が照れたのに間違いはないんだろう。
もう風は冷え切って、草の絨毯もその熱を奪われてしまった。夏美の下にハンカチでも敷いてやろうかと傍らを見るが、彼女は僕の肩から動こうとしなかった。風になびくその薄い色の髪は、その中に舞う落ち葉のように華麗に落ちていく。
この場所は墓地でありながら聖域でもあった。僕ら以外の誰も立ち入らない、僕らだけの何かを育む場所。音楽を奏で何かを祈り――
「あと二年もたないって言われてる」
「……」
「教室、戻ろうか。そろそろお昼休み終わるよ」
「うん」
夏美は明日からお弁当を作ってきてくれるそうだ。くしゃくしゃに丸めた惣菜パンの包みを、僕は夏美の分も含めてポケットに突っ込んだ。

つづく。

3．残しておきたい風景

3．残しておきたい風景

少しばかり反則だと思うことがある。
それは夏美の行動力と、その裏にある彼女の目のことだ。それを縛るにはあまりに事情が重過ぎて、けれどその行動は僕の校内での立場をますます悪くしていくものだった。具体的にというとあまりに……そう、非常識だったのだが、あいにく彼女は「恋人ならふつう」と言って聞こうとはしなかった。
クラスでは慣れたものなのか、誰もその行動について意見する人はなかったが、風祭の視線だけは依然として強いまま。教室から一歩出れば「馬鹿が出た」と口に出さずともわかるような視線ばかりを浴びる。もちろん「馬鹿」っていうのは「バカップル」のことを言ってるとは言わずもがなだった。
冬の寒気を溶かす僕らの愛は――それはそれは熱く、色々なものを燃やしていったのだ。
内外を問わず、僕らの周りを。

――ぶらいんど・そんぐ――

学校を特に楽しいと思ったこともない。けれどつまらないということもなく、平々凡々とした暮らしをしていた、と思っている。まあ周りは僕を「冷めている」と冷やかしたけれど――それでもそれなりに感動を覚えたりはしているのだ。

数学の問題で、上手く公式を使えるとうれしくなる。難しい漢字を知っているとそれだけで誇らしくなる。教科書に載っていない、例えば専門書に載るような歴史を知っていると楽しい。

そういう誰にでもある感動だ。でもただ一つ――ただ一つだけ、そういった感動を知らない授業があった。男子なら誰でもその授業を喜び、今もそうして笑いながら、また汗を流しながらグラウンドを駆け回る僕の仲間たち。

体育の授業のたび、僕は暗鬱とした気分になった。周りはもう知っているから明け透けにものを言うことはなくなったけど、けれど確かに視線は感じるのだ。時折ちらちら、「またか」とでも言うような視線だ。

グラウンドの隅で、僕はスコアボードの監督だ。スコアボードだけが体育の時間に一緒にいてくれる。

スコアラーが一人確実に確保される、などと僕のクラス入りを歓迎する声もあったくらいだ。

慣れたもの慣れたもの――心のうちに言い訳を募らせ、また今日も無表情を強いる日々。親友の衛が前線に大きくボールを蹴り上げる。惚れ惚れするような放物線を描いて見事フォワードの下へわたったボールは、そのままゴールネットを軽やかに揺らす。ああ、衛はそういえばサッカー部にいたんだっけ、今も現役で。

普段馬鹿騒ぎをする人たちも、ここでの馬鹿騒ぎはまた一風変わったものになるのだ。一層楽しげに、いや――そこに実が伴う分、馬鹿騒ぎとは言わないのかもしれない。

こうして隅で羨望の視線を送る僕こそ――

……やめにしよう。この道を選んだのは僕だ。今もそれに後悔はしていない。僕と舞子が笑っていられるのは、この道を選んだからなのだ。

悔いはない。

そういう言葉を、僕はもう五年近くも重ね続けていた。

――――――――――――――――――――

それを追求される日がいつか来るとは思っていた。事情を知っているのは僕の家族と医療関係者、それから説明をした教師のみだ。

生徒はただ「体調が悪い」としか伝えられていない。そういう状況で拮抗したまま誰も聞こうとはしなかったというのが、ある意味では暗黙の了解だったのだ。
そこに石が投げ込まれ波が生まれた。石が夏美で、それを手伝う風となったのが衛や舞子、波が風祭だった。
「体育の授業、そういえば今日は保健だったから教室から校庭が見えたんだけど」
昼休み、夏美の口からその言葉が投げられた時点でわかっていた。
――波が来るんだと。
「舞？　どこか悪いの？」
「ん……ちょっとね」
その煮え切らない返事に、案の定のってきたのは風祭だった。業を煮やしたとでも言うのだろう、煮え切らない僕と正反対の気勢だった。
「いつもそうなんだよ。体育の授業は一度も」
恐らく……恐ろしく好意的な意見だが、この時点で夏美は僕の事情を察してくれた。だから「ごめん」とだけ言って話を切り上げようとしてくれたのだ。けれど一度火のついた風祭はそれだけで止まらず、
「体調不良って、二年も続くのかよ？」
「それは……」言い訳を考えていないわけではなかった。
いつしかこういう事態が発生して、事情を知らない生徒と軋轢を生むこともあるだろう。そう思っていくつも用意してきた言い訳が、夏美を前にして吹き飛んでしまった。
真実はある。それは夏美には話せない。
けれど嘘はつけない。それ自体が嘘だというのに。
「はっきりしねえなあ」
普段は温厚というべき口調もこの有様。目も当てられない。
「結局何なんだよ？　お前の『体調不良』ってさ」
言うつもりはなかった。言い訳もこのとおりだから、黙っていよ

うと思っていた。そのうち飽きて引き下がるだろうと。けれど彼は思惑通りにはなかなかいかず、今度火をつけられたのは、予想外にも衛だったのだ。僕のことを「相変わらず冷めてるなあ」と呆れながら、風祭を睨む。
「その辺にしとけ。お前にも聞かれたくない事情の一つくらいあるだろ」
「意外と大人だね、衛」
「褒めるな」褒めてない。
「あるが、他のやつらに迷惑はかけてない」
「ほお」衛は面白そうに笑った。
「じゃあ言ってやろう。野球部がグラウンド独占しててサッカー部は大変迷惑している」
「それは俺の事情じゃないだろう！」
「はっは、怒るなよ風祭。俺はこう言ってるんだ、こいつの事情がこいつだけの事情だとは限らないぞ、ってな」
びくりと身体をすくませたのは、言われた風祭だけではなかった。
……僕だ。衛は知らない、知らないはずなのに――どうしてそういうことが言えるんだ。
「妬くな風祭、男のヒステリーは気持ち悪いぞ」
「な……っ！　てめえ……！」
手を上げようとして、すぐに思いとどまったのは野球部の話が出ていたからだろう。
というよりはずっと、僕も同じように衛に手を上げようとしていたからかもしれない。そんな僕をも笑い、衛は続けた。
「まだ言うことがあるなら俺が聞く。ここでは言うな」
ぐっと呻いた風祭はさすがに劣勢と見たのかうつむくが、しかしそれは決して逃げなどではなかった。いや衛から見れば逃げなのかもしれないその行為は――僕の、夏美の、そして舞子の人生に大きな石を投じることになったのだ。
単純に僕に矛先を向けただけ。

「またお前はそうやって自分だけ関係ないみたいな顔して逃げるのか？　冷めたフリしてよ。だせえんだ……」その言葉は続かなかった。

そこかしこから悲鳴が聞こえる。女の子の悲鳴だ。

そこかしこから怒号が聞こえる。男子が衛を止める声。

「お前、野球ばっかやってて脳みそまでボールになったか？　俺も大概だが、脳筋野郎なんざ総じてクズばっかりだぞ？」

「っにすんだよっ！」

なんで喧嘩になれるんだよ。

僕のことで。

どうでもいいじゃないか、迷惑って、僕が体育を休んで何の不都合があるっていうんだ。確かに人数は奇数になるし、僕がやるべきところを埋める人も必要になるかもしれない。けれど僕だって他の部分で色々な穴を埋めたりしてるじゃないか。

助け合いなんてまやかしか？

クラスの仲間なんて、ただ集まっただけのただの集団か？

そういうことをひとしきり考えて、僕はゆっくりと席を立った。何も言いたくなかったし何もやりたくなかった。聞きたくもなかった。

けれど風祭がそれを止めて罵る。衛はそれに逆上してまた喧嘩は激化する。

「気づいてなかったのかよ！　皆『どうしようもない事情がある』ってことくらいわかってたからつつかねえようにしてたんじゃねえか！」

それから、

「こいつが自分の事情だけでそういうことできねえやつだってこともな！」

買いかぶりだ。

いつのまにか頬が痛くなっていた。ああ殴られたんだと気づく前に夏美が僕の頭を抱いてくれていた。
「だいじょうぶ？」ひどく心配そうな顔だ。
「うん。けど、保健室、連れてってくれるかな」
それでも頭は回るんだからいやになる。こんなときにも僕は夏美に真実を聞かせないように努力をしているのだ。彼女は僕に、しっかりと真実を伝えてくれたというのに。
どうしてこうなったのか――そんなの知ったこっちゃない。
夏美が僕の肩を抱いて身体を起こそうとしているけど、やはり男と女じゃ体格が違いすぎる。それを手伝いに来たのが当の衛だっていうんだから……そりゃあ悪循環だ。
「教室ン中でいちゃつくなよ！　目障りなんだよ！」
「っ……」
僕の隣で息を呑む音。
「ちょっとは人の気持ちも考えたらどうだ！？」
ああ――夏美まで。
「そこまで非常識かよ！」
僕が怒らないで誰が怒るんだ。
そう思う前に、夏美は僕を放り出して走っていた。
ああ――走っている。スカートを舞わせ、髪をひるがえらせ、軽快に僕から離れていく。いつかこういう日が来るのだとわかっていた。
ああ――夏美が僕から走って離れていく。
でも追えない。
「お前もお前だな。追いかけもしねえのか」
「無理だよ」
「あ？」
「僕の足は、もう、一生、走れないようになってる」
夏美がどれだけ僕から離れても、僕はその距離を縮めることすらできない。僕の足はあの日とっくに、どうしようもないくらいに―

―壊れてしまったんだから。

――――――――――――――――

触れてはいけないものに触れた人間がどういう反応をするか。
ただ呆然とするのみだ。
それをたたき起こす人間がいるとするなら。
それは触れてはいけないもの、そのものだ。
教室に破裂音が響いた。パァンとと軽い、しかし何より痛みを感じさせる音だった。それも何度も何度も、このまま水音まで加わるんじゃないかと思うほど――
何度も何度も、風祭の頬を張る舞子の姿があった。
皆呆然とするばかり、誰も止めようとしない。けれど舞子が、舞子が泣いてる。仕方ない。頬は痛むけどと腰を上げ、舞子の腰を後

ろから抱きとめた。
「落ち着け」
「お兄ちゃんっ……こいつが！　こいつがお兄ちゃんを馬鹿にした！　お兄ちゃんの足を！」
「いいんだ」
「よくない！　お兄ちゃんが『走れない』なんて言っちゃった！　言わされた！」
「事実だろ」
なんでこいつはここにいるんだと思えば、既に垣根のような野次馬がこの教室の周りに集まっていた。それにしても他学年からとは――
「お兄ちゃんが許しても舞子は許さない！　代わりに走るんだって、あの時誓ったんだから！」
「舞子」
「謝れっ！　お兄ちゃんに！」
ああいつ以来だろう、舞子が僕のためにこうして怒るのは。
――お兄ちゃんの代わりに舞が走るよ！
あの時嗚咽しながらはっきりとそう言ったことは今でも覚えている。子供ながらに感動したこともだ。けれどそれからしばらくの舞子は本当にひどいものだったのだ。荒れているといえばまだ聞こえはいいくらいで、走れない僕を馬鹿にする友達をこっぴどく叩きのめした。子供だとはいえ、同じ子供を殴れば怪我だってする。問題は山積みになった。
中学に上がってしばらく、僕の事情が知れぬ頃には大人しくなっていたのに。
まだ目を白黒させる風祭を他所に、動き出したのはまたしても衛だった。
「落ち着こうな、舞子ちゃん」
「吾妻先輩――」
「問題になるのはごめんだろ？」

「――どいてください」
前に立ちはだかった衛がどいても、僕がいるんだって忘れてないかな。腰に腕を回したままだけど。
「私はあの人が地べたに額こすり付けて謝るまで許すつもりはないです」
「過激になったね」
「お兄ちゃんのためになら人を殺せます」
「やめてくれ」
「お兄ちゃんが困るからやらないだけです」
「それでいいんだ」
なんてシュールな光景だろう。舞子はただ前を見据えながらもしっかりと僕の言葉を聴いてくれている。その目を見なくてもわかる、明確な「殺意」をもって風祭を見ているのだ。
あの日、初めて舞子がその目をしたとき、僕は僕の立場を忘れて、ただそれを恐れた。少なくとも十かそこらの子供にできる目つきではなかった。だってそうだろう？　友達を自分の視界から消してしまおうなんて、普通に生きていて――程度の差こそあれ、思うわけがないのだ。
僕が舞子の腰を抱きながらそう思っていると、ふと抵抗がなくなった。離しても大丈夫だろうかと見ると、舞子は肩を震わせて頭だけで僕のほうを振り返っていた。ああ――この目も。
「……また、やっちゃった」
「ああ、まただ」
「何も見えなくなった」
「悪い癖だ」
黒く淀んだ泉を揺らすような、静寂な瞳。深い後悔と、いまだ対象を許しきれていない不完全燃焼に彩られた深長な涙。僕を見る目が変わっている感覚。
疲れたように僕の胸に崩れた舞子を受け止め、まだ呆然とする風祭に視線を移した。それにすら気づいてないようだ。

「ごめん」
「――あ？」
「でも、風祭の言葉は絶対認められない。……行ってくる」
衛はうなずくだけで、何も言おうとはしなかった。その横を通って――
「なあ」それを止める声。
風祭だった。
何を思っているかはわからないけれど、うつむいて表情はうかがえなかった。ただ言えることといえば、その声が床に沈んでいて、その言葉が他の誰にも届いていないということだけだった。どうあがいたって――もう取り消せない言葉が多かったからだろうね。
けれどそれでいいのだ。元々僕らに非があって、それをとがめただけなのだから。冷めていようがなんだろうが、その言葉をそのままにしておくほうが、よっぽどに残酷なのだ。だから、その上に言葉を塗りたくって、重ね合わせて、それを違う何かへと変えていかなければならない。
魔法の言葉というものが、ただそれだけだった、というだけのことだ。これ以上の「音」もないだろう――深く染み渡る声だった。

――――――――――――――――――――

夏美は校外へ出られるような肝っ玉をしているわけでもない。けれど授業をサボれる程度には垢抜けていて――彼女がどこへ行ったのか、それだけの判断材料があれば十分だった。

冬の木々は少しばかり衣服をはだけ、腕を空に広げる。寒々しい空気の中でも萎縮することなく、堂々とその場に立っている。生命を燃やし尽くしたあと、今度は大地の生命を吸い上げて、次の生命へ繋いでいく。そういうたくましさを感じる。確かに少し冷酷な感じはあるけれど――どうしてそれを否定する気になれるというんだ。

いつもの場所にうずくまる小さな影があった。震えながら雫をこぼしていた。

――わたしの幸せは、わたしの幸せを壊さない。

――今の幸せが、次の幸せを壊すかもしれない。

だから言ったじゃないか。夏美の幸せが夏美の幸せを壊さなくとも、それが誰かの幸せであるとは限らないんだ。それが不幸であったなら、夏美の幸せだって壊れてしまうことだってあるはずだ。僕は彼女の言葉を否定できなかったけれど。

霜をはらんだ草を踏むたび砕けていくもの。さくりさくり、もうお昼だというに。

「……夏美」

返事はなかった。

「風祭がごめんって」

「……いい」

怒ってるわけじゃない。そう加えて、夏美はまた黙り込んだ。この音は好きじゃない。

風鳴りだけ、葉擦れだけ、それがあれば退屈はなかった。苦痛ももちろん、それぞれの奏でる音と夏美の存在とで何よりのハーモニーだった。けれど、今はとても好きになれない。

黙ってるわけにもいかない。

「少し、遅れた」

「うん……いいの」

話をしようと思ってた。校舎からここに来るまでずっと、その先に待つものについて考えてた。

目の見えない女と、走れない男。

何不自由ない生活が送れるはずがない。日常走ることなんてないけれど、もしも女が危険な目に遭っていても、急いで駆けつけることすらできない。もし男が危険な目に遭っていても、それを見ることもできない。

僕らはそういうものを抱えて一緒になるだのなんだの、言っている。いや――彼女は何も知らないままだった。だからこうして話そうとしてる。

同じ土俵に立って、今度は対等に。

心の準備はオーケーだ。動揺はない、水も飲んできた。夏美がちゃんと僕の言葉を聞いてくれていることもわかった。それだけだ。

それだけなのだ。「音」にするだけで、僕らは同じになれる。何をためらうことがある。

「夏美……聞いて」

夏美が顔を上げる。

つづく

4．はじめての距離

4．はじめての距離

僕の言葉は、少なくとも正確には夏美には伝わらなかったように思う。けれど僕の意図するところに多分な「希望」が含まれていたのは覆しようのない事実でもあって、夏美は僕に夢想家と吐き捨てたのだった。そのあとはどうするでもない、ただ二人並んだまま音楽を奏でようともせず木陰に腰掛けていた。

もうすぐ冬休みになる。この林で会える時間はほとんどなくなり、少しばかりの空隙を挟んで浮ついた心地を世界から甘受することになる。それが明けて尚地に足がつかないまま、「休みボケ」なんてものに悩まされているみんなを見ながら、夏美は何を想うんだろう。空虚、軽薄、そういう言葉たちをその耳に捉えながら――何を見るんだろうか。

僕の席の後ろで夏美と風祭が楽しそうに話しているのが聞こえる。本当に楽しそうだ。

特に避けられているわけでもないことはわかっている。朝、風祭より先に僕に挨拶するのもいつもどおりだ。ただ、こういうのはきっと自意識過剰ってやつなんだろうけれど、夏美は僕をその視界の外へ放り出してしまったように思う。首をぐるりと回さないと見えないその位置に、僕を置いてしまった。

教室の空気は色あせて、冬の冷気がそれを乾燥させて、僕のため息は中途半端な熱でそれにひびを入れた。休みにもなっていないのに、僕はもう浮ついている。地に足がついていないのがなんとなく、額のほうで自覚できた。ふわふわしてる。

「それでね――」
「ああ――実は――」
声が聞こえる。楽しそうに弾んだ声だ。
僕の意識の外で駆け足で進んでいく。世界が夏美が、走って遠ざかっていくように感じた。あの林の葉もすべて枯れ落ち、僕の好きな葉擦れは聞こえなくなった。あれから初雪も降った。朝、家を出る前、庭に置いてあったバケツの水が凍っているのを見た。
ただ変わらない――僕の隣を歩く舞子。ゆっくりとした一歩一歩を焦ることなくついてきてくれるかわいい女の子。それだけでいいんだと、僕は安堵を感じていた。
みんな走ることができる。僕を含め、みんなの視界はこんなにも広い。僕と夏美の違いはそんなもの。僕と夏美、それから世界の違いはいかほどか。あるいは舞子も――
ひゅぅっ――カタカタ。風が鳴って窓が揺れる。もともと音には敏感だった。この教室を満たす喧騒の中にあっても、風鳴りひとつ聞き逃さない自信が僕にはあった。ふと後ろで聞こえる呟きもまた、僕の耳にはしっかりと入っているのだ。
「きれい」
ああ、そうさ、何よりもきれいな音だと思うよ。何ものにも冒されることのない透き通った歌声はけれどか細くなどはなく、ただ直向に聴くものを圧倒する緩やかな波となる。風のまにまに聞こえてくるその声に身をやつしていればそれだけで脳から解かされていくような心地になる。
何ものにも叶わないその願い。僕の知る夏美はいなくなって、代わりに現実をしっかりと見据えた最上の女の子がそこに現れた。きっと人間社会で生きていくならばこれ以上の人間はいないのだろうと思えるほど、彼女の立ち振る舞いは優美で、堅実で、惚れるなというほうが無理な話だと衛に言わしめるほどだった。
けれど僕はそれを見て思う。僕とは付き合わないほうがいい。付き合ってなんていられないはずだ。

思い出に多少の色を塗りたくって、そこに僕を重ねていただけ。だから実際の僕を目の当たりにして、その塗装が剥がれて、そうしたらそれが厚ければ厚いほどに周りがよく見えるようになったはずだ。目が覚めたんだろうと思う。

けれどけれど――これぱっかりを重ねて尚余りある事実――夏美はまだ僕と付き合っていた。昼にはあの林で夏美特製の弁当をつまんだあと音楽を奏でる。最上の時間をすごしていた。風祭もそれを知っていて、それでも林にまでこようとはしなかった。

教室の風景が多少色あせる景色の中で、僕の思考は冷たい空気に晒されていっそうクリアになっていく――けれど先が見えるだけ、ちっとも進んじゃあくれなかった。

――――――――――――――――――――――――

舞子と夏美が初めて話をしたのもこの林だ。会うなりものすごい形相で夏美をにらみつけた舞は、言いたいことだけを言ってきびすを返そうとまでしてしまった。それはつまり「あんたのせいで」とかそういう罵詈雑言だった。

夏美はそれでもちっとも慌てた様子もなく、ただ平然とその言葉を聞き流していた。そのあとの言葉がこれだ。

「怒っても変わらないもの。舞は走れないんだよね」

このあとの舞子もよく我慢したものだった。これが風祭だったらまず間違いなくまた頬を張っていたんだろうと思うけれど、舞子は夏美を殴ったりはしなかったのだった。僕が止めろといったのが半分。もう半分は――

「死角だもんね。卑怯な真似したくない」

要するに意趣返しのようなものだった。けれど夏美はそれでも表情を崩そうとすらせず、何かを悟ってしまったような、腫れ物が落ちた――あるいは隠した、そういう無表情をしていた。

「舞子ちゃん、だったよね」

「……それが？」

「名前の通り。すごくよく似てる。舞にそっくりだ」

「ですね。いつもお兄ちゃんの背中見て育ってきたから」

その言葉のあと、夏美の表情が一変する。

すべてを許した微笑みだった。何者をも愛そうとするような、ただひたすらに優しい微笑みだった。それこそ、舞子の怒りがすべて萎んでしまうほどには。

「わたしはね、もう喧嘩なんてしないんだ。舞の周りにいるみんな、みーんな、好きになりたい。舞子ちゃん、わたしはあなたの笑顔を覚えておきたいの。見えなくなってもずっとずっと、舞の大好きなその笑顔を、覚えておきたいと思うの」

と、夏美は言った。僕の背ばかり追ってきた舞子より、いろいろ

なものを見聞きして、それからそれらの何割かを捨てなくちゃあならなくなった夏美のほうが一枚も二枚も上手だった――それだけのことだった。
舞子は怒ることももちろん笑うこともできず、ただ呆然と立ち尽くし、その夜僕に「ごめんなさい」と泣きついた。僕は「夏美と仲良くしてやって」と言い、その背を抱いてなでてやるのだった。

そういうわけで、夏美はこうして笑っているのだった。
――僕もまた舞子と同じ、ただ思い出の中で笑う舞子の影で、ただその背に憧憬を抱いていた男だ。夏美より一枚も二枚も下手の人間だった。だからこうして卑屈な思考に身勝手な不快感を覚え、あるいは心地いい音を逃げ道に無表情を決め込んでいるのだ。
独占欲なんてきれいなものじゃなかった。風祭と笑いあう夏美が許せないという気持ちすら黒く胸に渦巻いた。暗たんとした気分が背筋を這って、指を動かし机を叩き、脚を動かし床を蹴り、脳に取り付き熱に浮かせた。それでも夏美の声はきれいだった。
そんな時に決まって夏美は僕を呼んだ。
「ごめんね、舞、ちょっといい？」
「――ん、どうしたの？」
「ちょっとついてきて欲しいの。資料室、荷物取りに」
「わかった」
立ち上がって夏美の隣を一瞥し、同じように立ち上がる彼女の背に続く。
――夏美は風祭をちらりとも見ようとしない。

しばらく無言のまま廊下を歩いて、一限の予鈴が鳴ったところで階段に差し掛かった。角を曲がるとき、少しだけ夏美の歩調が変わる。見づらいか、あるいは人よりずっと注意しながら歩いている印象だった。そうして階段を上がりきったところでふとため息を聞いた。

振り返ると、夏美が僕を真正面に見据えていた。深い色だ。

「イライラしてるね」

疑問系にすらなっていない、確信に満ちた声。まさしく核心だった。

「嫌な気分？」

「……かも知れない。それを自覚するのも嫌な気分だよ」

「わたしはうれしいの。だってわたしは浮気なんてしないってわかってるもの」

「夏美」

「わたしは浮気しない。少し仲良くなっただけの男の子と話してて、

大好きな男の子が嫌な気分になってる。わたしを好きな証拠」
「……敵わないな」
まったく敵わない。全部お見通しだ。
「ただ――」
ただ、僕だって夏美をわかってるつもりだ。彼女にやられっぱなしも癪だったから、僕は彼女の言葉をさえぎるように口を開いた。
「余裕のある自分が少し不快」
「……わ。あはは、ちょっとびっくり」
「なんだかんだで、わかっちゃうもんだね。夏美の顔見てると、わかる気がする」
「んふふ、わかられちゃったかあ。あはは、でもそうなんだよね、恋人が嫌な気分でイライラしてるんだもの、自分のせいなら、申し訳なくって必死になりたいんだよ、本当は」
夏美の表情は変わった。
僕の前でだけは怒ったり悲しんだりしてもいいんだと、夏美の決意を聞いたそのときに僕が言ったのだった。少しだけキザったらしいそのセリフがいたく気に入ったらしく、夏美は笑いながら「じゃあそうする」と言ってくれた。
彼女の不安が胸にぶつかった。すがるような上目遣いで僕を見上げている。
「見ていようって思ってたら、なんとなく人の機微に敏感になった。風祭君が怒らないようにするにはどうしたらいいかな。クラスメイトを笑わせるにはどうしたらいいかな。そういうのが、考えなくても行動で現れてくる。なのに――」
僕の制服の胸辺りをぎゅっとつかむと、そのしわを見るようにして夏美がうつむく。震えた声に余裕なんてものはない。
「なのに舞が怒ってる。わかってたはずなのに、そういう結果に甘んじてるわたしがいる」
「……だからこうしてアフターケアしてくれてるじゃないか」
うれしいよ、正直飛び上がりそうなほどだ。決して夏美は僕を忘

れていたわけじゃない、僕の感情に気づけば風祭より優先してくれるのだとわかっただけで、それだけで十分にうれしいんだ。けれど夏美はそうは思えないようだった。
「それって信頼に甘えてないかな。舞はわたしを信用してくれてるから、あとで謝ればいいんだって……甘えてないかな」
「夏美……」
なんて不器用なことだろうか。ただ自分の幸せのためまい進していたことに後悔したと思ったら、今度はこれだ。
「人の幸せは時に両立できないこともあるって、わかってたでしょ？」
「……それは、でも」
「いいんだよ、僕は、一日の終わりにでも『ずっと舞のこと考えてた』とか言ってくれれば、それだけで全部許せそうだから。きっと風祭と夏美が話してたときの僕が言っても説得力はないんだろうけど」
「そんなこと、ないけど……舞、わたしはそうやって誰か他の男の子と話してるとき、舞のことを見てることもできなくなるの。舞がイライラしてるんだって、わからなくなるんだよ。謝ることもできないかもしれない」
ああそうとも、わかってる。――いやわかってないのかな。
ただ、そういう「目が見えないこと」、「走れないこと」について話し合うのを避けるのは禁止したんだ。それによって感じる不安、悲しみ、あるいは些細でもいい喜びを、僕らは何もはばかることなく話し合うことにしたのだった。
だからそうさ、僕は胸を張っていえるんだ。冗談めかせばちゃんと笑ってくれるんだ。
「怒ったってさ、夏美」
「……？」
「僕は怒ったって、夏美から走って逃げることもできないんだよ。ゆっくり歩いてる僕に追いついて、夏美は『怒った？』って聞けば

いい。見えてなくったって、きっと夏美は僕に追いつけるようになるよ」
「……舞」
そうして夏美は僕の目を見てくれた。色の薄いその瞳に僕を映して、それを少しだけ揺らしている。
「どうしよ、あはは、うれしいや」
照れたように笑う夏美が愛しくて仕方ない。
思えば笑えない冗談ではあったけれど、僕はこうして夏美を笑わせることができるんだ。うぬぼれでいいのなら、きっとこの笑顔は嘘じゃない。その腰に腕を回して、細い身体をぎゅっと僕の方へ引き寄せると、夏美は驚いたような悲鳴を上げた。
この身体も全部、僕のものにしてしまいたい。教室で感じていたもやが嘘のように晴れていた。
「夏美、好きだ」
「――舞。わたしも、わたしも大好き。久しぶりに聞けたよ、その言葉……」
「そうだった？　不安にさせちゃったかな」
だとしたら大失態だ。けれど夏美はまだ笑っていた。
「あとで謝ってくれればなんでもいいよ。そうやって、何でも話していこうね。わたしたちはほら――音を失くしてなんていないんだから」
ああそうとも。
僕らには音がある。耳を澄ませばどこからか聞こえてくる風の音も、錯覚のように耳介を跳ねる夏美の心音も、それによってどこか遠くへ追いやられてしまった校内の喧騒も――全部が全部、僕らを包んでいるとわかるんだ。僕らはそれを愛しているんだとわかるんだ。
夏美と繋がっている部分の最たるものがそれなんだと思う。夏美が夏美であると思える一番のものが音なんだと思う。知り合ったのも、仲良くなったのも、そしてこうして恋人同士になれたのも「音」

がきっかけだった。僕らはそれを忘れなければいい。
　きっと順風満帆じゃあないだろう。共に生きる苦楽があるのなら、苦のほうがずっと多いのかもしれない。ただ――少なからずの、今感じているような「楽」に少しずつ満足を覚えて、それを糧に生きていけばいい。
　けれど時々不安になる。夏美の思い出が全部剥がれてしまって、僕という現実に失望してしまうその日――思い出に負ける日。夏美はそれを知っているようだった。
「人は変われないんだよ。環境を変えてそれに流されて、そういう今の環境を見る目で懐かしむから、変わったように見えるだけなんだ。わたしの目はあの日のまま――舞はあの日のまま、ずっと音を愛してる」
「……今の環境」
「うん。少しばかりの社会性を身につけて、社会に溶け込むのが上手になって、それを人の奥底なんだって思うようになるの。それが大人になるってことだと思うようにね」
「ずいぶん話が飛ぶんだね」
「いいのそんなこと。だからね、思い出は可能性なの。舞がどれだけ周りに流されてしまっても、舞はあの日の舞になれるんだって。あ、でも今の舞を否定するわけじゃなくて……要するにわたしの周りの誰も、思い出の舞より魅力的な人はいないの。わたしの知ってる舞の奥底は、わたしにとっての何よりなの」
「僕はもう夏美の知る舞じゃないかもしれない」
「だからね、舞、わたしの色眼鏡は舞の奥底を見てるんだよ。わたしたちはもう子供じゃないんだよ」
――夏美の言いたいことはわからなくもなかった。
　僕らは子供だけれど、もう子供じゃあない。自分の価値観を形成しつつあるし、それが大人に何を諭されたところで覆されるとも思ってない。ただお金を持っていないだけ、社会を知らないだけ、つまり自分を飲み込むほど大きな流れに身を浸したことがないだけな

のだ。それがどれほどのものか、僕にはまだわからないけれど……
夏美はずっと僕を好きでいてくれるだろうか。
あるいは僕は、夏美の好意をもらうにふさわしいのだろうか。
「舞、聞いて」
夏美はけれど許してはくれない。夏美に不安を抱くことを、僕に許してくれない。
「好きだよ。今この瞬間、わたしは何よりも舞を優先させるんだ」
「……僕もだよ。きっと、夏美に何があっても駆けつけるよ」
「……あ、今のちょっと反則。ずるいなあ、その言葉」
「ちょっと狙った」
「ふふ。じゃあわたしも、ずっと舞のこと見てるね」
とりあえずのところ、今の僕らには想像もできない。
そういうところに落ち着くしかなかった。それは決して悲観ではなく、かといって楽観でもなく、確実に僕らの間の「距離」を現していたのだと思う。
付け入る隙として、その距離はいかほどのものだろうか――そういうことを考えようとして、また夏美の唇に遮られる。夏美は許してはくれないのだ。今この瞬間の幸せが途切れてしまうことを、決して認めようとはしないのだ。

つづく

5．狭いね

あるいは安心していた。
あと二年ある。「二年もたない」という言葉にそんなことを思っていた。
――楽観だった。

――ぶらいんど・そんぐ――

夏美の視界がどんなものか、実際にはうまく理解していなかったんだと思う。なんとなく視界が狭いんだろうと思っていた程度で、何がどう見えているのか聞いたこともなかったし、何より僕はずっと広い視界に生きてきた人間だ。人間がいかに想像力に優れた生き

物であるとはいってもそれにだって限界はある……とにかく何度目を閉じても「当たり前」を覆すことなんてできっこなかった。
そんなある日に、夏美からデートの誘いがあった。これだけ長い時間付き合ってきて、そういえばデートに行ったことがなかったなあ――彼女の目に遠慮していたのかもと思うと少しだけ申し訳なかったけれど、夏美はまた「隠さず言ってくれたらいいよ」と笑ってくれたのだった。
それを聞いた舞子は、少しぶーたれてたけども僕が気にするほどでもなくて、概ねは夏美との仲を認めてくれている。だから僕の服装を見て「もう少し気を遣いなよ」とおせっかいを焼いてくれるのだ。まあ気を遣うほど種類を持ってないから、それこそカーゴパンツにモッズコートという、恐ろしいほどシンプルな服装に落ち着いたけども。インナーもこれまたシンプルな灰色のカーディガン。
住宅街を挟んで学校と繁華街があるという形のこの街は、お世辞にも都会とはいえない人口数万人の衛星都市だ。だから人通りといってもすれ違う人は両の手で数え切れるし、ほとんど避ける必要もない。夏美が待ち合わせに選んだのは、そんな繁華街中央の駅前広場だった。そこにある噴水に座って待ってると言った電話の声は弾んでいて、デートという言葉に浮かれる僕とその後随分長いこと話し込んだものだった。
電話を切ったときはもう深夜で、待ち合わせは朝の九時。眠くないかなと心配になったけれど、着いたときにはもう夏美はそこにいて、ずっと地面を見つめていた。舞子が言っていたけど、今モッズコートが少しだけ流行ってるらしい――舞子もまた同じような格好をしていて笑ってしまった。
声をかける。夏美が笑顔で顔を上げた。
「おはよ、舞」
「おはよ。待ったかな」
「……んーん、今来たとこ」
何を思ったのか、うれしそうにそんなことを言う。

「んふふ、デートの待ち合わせ常套句、その一制覇」
「なにそれ」
と笑い合って、少しだけ違うことに気づく。
帽子――つばの長い黒のキャップと、それから同じ薄茶色のサングラスをしている。からっと晴れた気持ちのいい日だったから、それだけでその意味に気づいてしまった。
僕の目がさぞかし心配――不安そうに見えたんだろう、夏美はごまかすように「大丈夫だよ」と笑った。
「舞はいつもわたしに合わせて歩いてくれてるから、歩きづらくなんてないよ」
「……膝に無理させちゃいけないからさ」
「てれかくし。顔、あっかいよ」
サングラスの奥は確かに少しばかり見えづらいけれど、夏美の目がどんな色をしているか、手に取るようにわかるんだ。口元もからかうように笑っていて、夏美は今このときからもうデートを楽しみ始めてるんだと思ったら、自分のことのようにうれしくなった。
だからこそ、その手を取って、あんまりの冷たさに笑顔が飛んだ。
「……いつから待ってたの？」
「……来たとこだよ」
言葉少なのままの夏美に引っ張られてたたらを踏むと、そのすぐあとに夏美が立ち止まった。歩き始めてすぐに人にぶつかって、謝って、結局また同じ場所に収まってしまったみたいだった。
駅前広場は、周りを数えるほどの木立に囲われただけの、広場としての区切りもないあるいはただの道だった。住人も待ち合わせに使う程度、ベンチにも噴水のへりにも、夏美以外の誰も座ってはいなかった。十数人が行き交う程度の広いその場所で――夏美は、横から来るスーツ姿の男性に気づかなかったんだ。
「夏美、僕は」
「いいの！　一時間前に来たから何だって言うの！」
何が気に入らないのか――声を張り上げた夏美は手も離さないま

ま俯いて肩を震わせた。何かに怯えるような、あるいはただ寒気を堪えるような、そういう小さな震え方だ。
――言ったじゃないか。僕の前で何かを隠したりしないでって、そう約束したのに。
今度は僕がその手を引っ張って、「行こう」とだけ呟いて街の方へと歩き出した。
夏美はゆっくりとした足取りで僕についてきてくれる。高層ビルもほとんどない、繁華街とはいえないような街並みの中、車の音がざあざあと流れていく……駅前から少し離れたら、あとはほとんどがビルと大型、中型店舗のジャングルだ。
電線が巡って、コンクリートに埋められた――随分と狭い空の下、色のない街の中でたくさんの音に囲まれながら、交わす会話に勢いはない。
「怒ったわけじゃないよ。身体冷やしたら風邪引くじゃないか」
「……ごめんなさい」
小さな声だ。身体ごと縮こまって、まるで夏美らしくない。
冷えた夏美の手を温めるように包むと、小さいながらも同じ温もりが力になって返ってくる。それだけで自信がついちゃうんだ、ほんとに夏美の手の不思議なところだった。
「わかってくれたらいいんだ。どこか温まれるとこ、入ろう」
「うん」
今思えば気にしてたんだと思う。心配かけたとかそういうんじゃなくて、本当に気にしているのはそのあとの、ただ歩き出しただけで人にぶつかったという事実――いやそのくらいは慣れたもののはずだ、移動教室のときに他のクラスの生徒にぶつかってるのを何度か見たことがある。……ただ、僕がそれを意識しているという点を除けば。
ごまかしたまま、あるいはある日突然真っ暗闇へ――そういう失明を、確かに僕は想像していた。視野狭窄と視力低下が少しずつ並行して進んでいく……そういうことに実感が湧かなかった。想像も

できていなかった、けれど夏美は横から来た男の人を避けることさえできなかったから、そういうことに気づいた僕の顔はさぞかし滑稽に歪んでいたと思う。
　そんな僕の動揺を、夏美はいつものとおり、僕のイライラに感づくように悟ってしまったんだ。僕が原因だ。
　人がいない、小さな二つのビルの間で僕らは静かに立ち止まった。太陽の光がわずかに差し込んで、スポットライトのように僕らを包んではなさない。ビルの谷間じゃ暗すぎると思ったけど、これじゃあ眩しすぎて変わらなかったかな。
「十年とか数十年スパンで進んでくって言われてるの、この病気」
「……うん」
「なのに、わたしまだ十六なのに、もう十度ちょっとしか視界がないんだよ」
　十度……視界の中でそれを想像するのは難しかった。
「その視界もいまいちはっきりしなくてね……周りはうっすら白んでて、ちかちかと何かが瞬いてる」
「うん」
　わからない。
「今日みたいな晴れた日は特にね、サングラスしてないとほとんど何も見えないんだ。サングラスっていうか、ちゃんとした医療用の遮光グラス……なんだけど、ね」
　言いながら、夏美は僕の手を離さないように反対の手でサングラスをずらして、僕を見上げる。いつもと変わらない夏美の目は、それでも僕の目を見つめてはいない。眉をひそめて目を細め、それでもじぃっと僕を見ようとしているのがわかるんだ。だから僕はそれから目をそらさないようにして、ただじっと夏美の息遣いを感じていた。甘くて温かい、いつも通りの夏美を。
　どれだけ集中しているのか、額にじわりと汗が浮かんだのを見て、思わず僕は親指でそれを拭った。「ありがと」なんて笑ってくれるのを期待していた僕は、驚いたように肩を竦ませる夏美から思わず

手を離してしまう。揺れる夏美からはまだ目が離せなくて、繋いだ手がすごく熱いのだけはやっとのことで感じることができた。
「そうしてくれるのも、気づかないくらいで」
そういえばそう、そうだったんだ。
僕らが会っていたのは学校の教室と、それからあの林――日光がちょうどよく遮られて、夏美にとってはサングラスの必要がない環境ばかりだったんだ。そういうことに気づいて、夏美が今日こうしてデートをしようと言ってくれたその意図の、一つばかりにようやく気づいたのだ。
「……勉強、しないと」
「そだね……勉強、して、……くれる、かな」
「夏美、僕は夏美が笑ってるのが好きなんだ」
「……？」
「だからそのためなら何だってするよ。目のこと勉強するし、風邪を引かないように心配だってする。だから夏美は僕が何をしたら笑ってくれるのか、教えてくれないと……鈍いんだよ、僕って」
今度はサングラス越しに、夏美はまた僕を見上げた。
やっぱり見える。変わらない、ちゃんと僕を見つめるその瞳が。
「鈍いのはわかってるよ。けど、舞はちゃんと、わたしを見ててくれたよね」
「……そりゃそうだよ、好きなんだから」
「そうだよね。舞はちゃんと伝えてくれたもの。だから……」
何を言おうとしてるのか、頬を染める夏美のその表情に、瞳に、一つ胸が跳ねるのを耳の奥で聞いた。
「だから、今日は最後まで、……最後まで、行こうね」
そうして夏美が放った言葉に、少しだけ心が手綱を離れた。一瞬自分が何を考えているのか、何を言うべきか、何をしているのか――そういうのが全部吹き飛んで、頭の中が真っ白になった。ただその中に夏美だけがいて……これが夏美の視界かなと、場違いにも思ったりはしたけれど。

「だってもう二度と見られないかもしれない。舞の……ね、はだか。おかしい、すごく恥ずかしいこと言ってるのはわかってるの。でも、でも……見ておきたいの、ちゃんと、覚えておきたい」
顔を真っ赤にしても目はそらさず、怖がっているとわかるのに震えもしない。今にも倒れてしまいそうなほど力の抜けたその身体を、すべて僕に預けてくれている。
――人としての責任という言葉が脳裏をよぎる。けれどすぐに掻き消えた。
「約束する。最後まで行こう、ね」
「うん……あはは、こんな早い時間に、する約束じゃなかったかも」
「……いいよ、そのときになっていろいろ考えるよりずっと」
「んふふ……えっちだな、舞は。そのとき、だなんて」
その通りだ、男なんて皆そんなもんだ。
妙に気恥ずかしくて、また夏美の手を強く握り直して「行こう」と促した。これもそうだ、急に引っ張られるとびっくりするからと夏美が教えてくれたものだった。同じように手を繋ぐときもそうだし、声をかけるのにだってやり方はある。
僕の場合は走れないだけ。あるいは跳んだり、そうして膝に負担をかけなければ特に気を遣う必要もない。急に曲げたりも避けたほうがいいかな――思い直してみると結構多いけど、夏美の感じているものと比べたらずっと些細なものなのだと思う。
デートプランはなし。ただ行きたいところに行って見たいものを見て、聞きたいものを聞いて、そのすべてを記憶に焼き付けてしまおうというのが夏美の希望だ。
「一緒に行く人ができたから、色んなところに行きたい。色んなものを見たい」
「……暇な学生だからさ、行こうよ、どうせなら行きたいところ全部」
「――この街の風景。全部見渡せるとこ、あるかな」
「ん……意外なところだけど、あるよ」

夏美が見たら驚くだろう。
なにしろほとんど人通りのないところで、あの場所に進んで行きたがるなんてせいぜい「二人」――だから、夏美がその風景を見て喜んでくれたらいいと思っていた。
喜んでくれるさ、僕と一緒なら――そう思ってたんだ、デートに浮かれた能天気な僕は。

――――――――――――――――――――

住宅街を学校方面に突っ切って、少し西にそれると林が見えてくる。学校もそうだけど、少しだけ小高い丘のようになっていて、夏

美には登るのは厳しいかなと思ったけれど、身体をくっつけて離れないようにしてやれば木にぶつかることはなかった。この時点で察しのいい夏美のことだ、ここがどこかはわかっているのだろう。
「疲れる？」
「だいじょぶ」
体力的にも、やはり視界というのは大きな意味を持つんだということも初めて知った。僕が真っ直ぐ前だけ見ていれば何も問題ないのに対して、夏美はしきりに辺りを見渡している。右を見てそこにあるものを記憶、左も同様にして、どうにか僕らと同じ視界になるように脳内で補完しているような状態だ――医師からはそう説明されたんだと言っていた。だから記憶した視界の中に、「歩いてくる人」なんてものはいるわけがないんだ。
少し大きめの石に足を取られた夏美を抱きとめる。コートの上からでもわかる温かい身体だ。
「んふふ、役得」
「何が役得だよ……行こう」
「はーい」
夏美のことは大体わかるからして、こんなところまで来て「やっぱり戻ろうか」なんて言えばどうなるかくらい、僕にはわかってしまうのだ。強情張った夏美と喧嘩して、「幸せな一瞬」を逃したくなんてない。
学校側のそれは手入れがされてるから、夏美も過ごしやすいカーテンのような梢がきれいだったけれど、西側斜面のそこはずっと野生的で荒々しい。どこからか野鳥の鳴き声も聞こえてきそうな暗い木々と生い茂る草の、それはほとんど壁のようなものだった。
夏美がこの林に入ったときに教えてくれた。遮光グラスがあるときはいいけれど、そうでないときには、こうやって突然明るいところから暗いところへ――あるいはその逆もそうだ、そういう切り替えがほとんど利かないらしいのだ。「だからこれからは気をつけてくれるとうれしいな」――僕は「気をつける」と答えた。

僕が半歩前を進んで草を払う。夏美に当たらないように丁寧にだ。
最近来てなかったからなあ、荒れ放題だ。
「舞はよくここ来てたの？」
「昔はね。落ち込んだときとか、そこに行くと気分が晴れるんだ」
「……あの林よりも？」
「気づいてるだろうけど、同じとこだよ。でもうん……あそこより、ずっと」
「……楽しみ」
声が弾んでる。
張り切っても足を速めたりはしない。それくらいの冷静さは保ってないと、これから「目の勉強をする」と言い切ったんだから。
初めて何か一つの物事――人に対してここまで執着できたんだ。初めての恋なんだ。股間だけじゃあなくって胸までちゃんと疼いてる。
膝にピリッとした痛みが走る。最近はほとんど感じたことのなかった痛みだ。
「もうすぐだよ」
返事はない。少し息が切れてきたみたいだ。
なにしろ真っ直ぐ前だけ見ていても視界が悪い。手入れも何もされていないただあるだけの林だから、そこは人が歩くような環境とはとてもいえないのだ。それを狭い視界で歩こうというんだから、そりゃあ無茶なのかもしれない。
いざとなったら負ぶってでも連れて行くんだ。……ダメか、膝が壊れる。夏美はそれを望んだりしない。
やがて視界が突然に拓ける。学校側へ登り続けて、敷地の少し手前で南へ折れたそこで林は途切れるんだ。そうして木がなくなり、きれいに整った雑草がさらさらと流れるそこは――あの日の丘に、とてもよく似ていた。
「わあ――」
よかった気に入ってくれたみたいだ。

僕の手を離さないまま、夏美は辺りをぐるりと見渡す。もう十一時近いだろうか、日も高くてそれはとてもありふれた風景ではあるけれど、この街のほとんどが一望できてしまうようなところだった。学校に続く緩やかな斜面に比べて、少し下ったあとにあるこの丘は斜面が急で、住宅なんかの遮蔽物のその上を見ることができる。ある程度の角度がないと、こうして見渡すことはできないんだと誰かが言っていた――

街を一望できるということより、ただ僕はこの丘の雰囲気が大好きだった。音を奏でたらそれが全部空へ消えてしまうような、何か「色々」から開放されたみたいな世界の広さ――それが好きだった。

「きれいだね」

「うん。気に入ってくれた？」

「……うん、最高だよ」

夏美は僕の手をくいっくいっと二度引いて、座るように促してきた。先に座った彼女にならうようにして隣に腰掛けると、冷えた草たちに少し悲鳴がこぼれた。

「あはは、変な声」

「ったくもう……ハンカチ、敷くよ」

「ん、ありがと」

夏美がお尻を上げたそこに、ポケットから取り出した黒い単色のハンカチを敷いた。お尻を下ろすと、余った部分が風になびいて少し揺れる。

「はぁ……っ」

落ち着くように、少し荒れた呼吸を整えるように――あるいは感嘆のそれだろうか、夏美がため息をこぼした。聞きなれたものだろうに、その吐息に少しだけどきっとしたりもしたけれど、その横顔を見るとそういう下世話なものが一気に消し飛んでしまった。

何かを愛惜しむような、何かを悟ったような、許したような、諦めたような……本当に色々なものを見ているのだとわかるその目。それらをすべて受け入れてしまった、小さく緩んだ口元。頬に光る

涙。
「きれい……」
本当にきれいだった。この世のものとは思えないくらいに。
だからその肩を抱いたんだ。宣言もなしに、けれど夏美はしっかりと受け入れて、その小さな頭を僕の肩に預けてくれる。幸せな重みに潰されそうになる。
「ねえ、舞」
「ん……？」
穏やかな声だった。何かを愛しむような、悟ったような、許したような諦めたような、すべてを受け入れてしまったような小さな声だった。
「狭いねえ、この街って」
もう本当に堪え切れなかった。
後から後から溢れて止まらなかった。
本当はわかってたんだ。夏美がここに来るまでいくつも小さな傷を負ってきたこと。それでも黙って僕についてきてくれたこと。涙で光るその頬に、僕は取り返しのつかない傷を負わせてしまったんだ――だから止まらなかった。もう二度と得ることのできないものが夏美にはたくさんあるんだって、わかってしまったから。
みっともなく嗚咽する僕の頭を夏美は抱きこんで、無理矢理に膝の上に乗せるのだ。ゆっくりとゆっくりとその温かな手で僕の頭を撫でて、小さなその声で歌を歌う。

あの時
パパと　約束したことを守った
こぶしをかため　胸をはり
ララララ　ぼくは立っていた
グリーン　グリーン
まぶたには　なみだがあふれ
グリーン　グリーン

丘の上には　ララ　緑がぬれる

僕らの大好きなその歌の、それは四番だったと思う。パパは遠くへ行ってしまったんだとなんとなく悟りながら、「僕」はその約束を想う。

どんなにつらく悲しいときにも泣くんじゃない、だったっけ。だとしたら僕は最悪だ、女の子に抱かれてみっともなく声にもならない声を上げてる。夏美の手が暖かくって、それが余計に何かを溶かしたみたいに涙を後押しするんだ。

「約束、しようか」

上から降ってきたその声が震えているのがわかった。

「泣くときは一緒に」

声にならないような声だった。

「ちゃんとあなたに、触れるところで、……泣いてくれないと、わたしっ、こうして……な、撫でてあげることも、できない、から」

もう嗚咽も堪えきれない。

まだ夏美の視界は消えてない。これから一年ちょっとくらいはこのままなのかもしれない。ずーっとずーっと……こうして一緒に丘に登れるのかもしれない。

もしも、夏美の視界が消えてしまうその日が来たのだとしたら、そのときの僕は涙を堪えて立っているんだろうか。拳を固めて胸を張って、夏美を守ろうと立ち続けているんだろうか。

夏美は「一緒に泣こう」と言ってくれた。約束しろって、震えた声で僕に言うんだ。

「こんなに素敵な風景を教えてくれたもの……もう何があったって、舞以外は見えないよ」

「夏美」

「約束、しよう？　色んなことを話すだけじゃなくて、みっともないこともかっこ悪いとこも、全部全部、わたしに見せて欲しいの」

目を開くと、夏美の顔が視界に映った。

広い――広い世界の中を、全部夏美が埋めていた。
「うん、約束するよ。悲しいときは、大泣きしてやるんだ」
「うん」
「浮気なんかしたら、すっごい怒るよ。二度としないって誓うまで許さないんだ」
「しないよ……浮気なんて」
「ずっと、笑えたらいいけどね」
「うん……それが一番だけどね」
ああ――世界は確かに狭いと思う。
こんなにも風は鳴るのに耳に入らない。こんなにも草はそよぐのに何も感じない。太陽は今も燃え続けているのに僕の目を閉じることさえできずにいる。空はあんなにも広いのに、僕の視界の十分の一も埋められない。
夏美の存在の、なんて大きいことだろう。風よりも透き通った声で、そよぐ草よりも確かで、太陽よりも温かで、そのきれいな顔は僕の視界をほとんど埋め尽くしてしまっているんだ。唇に感じる濡れた温もりは、それらのすべてを覆い隠してしまうほどに、僕の胸を緩やかに圧しつける。
この胸の苦しさは、他の何も僕に与えることのできないものだ。この喜びだって悲しみだって、夏美だからこそのものだ。
「ふう……んふふ、おいしい」
「……味、しないよ」
「お腹すいたら何でもおいしいものなんだよ」
「なるほど。……じゃあ、お昼行こうか。まだ始まったばっかりだよ、デート」
「賛成。下り、よろしくね」
もちろんだとも。
夏美の頬を拭って、僕も乱暴に目元を拭って、ゆっくりと立ち上がった。
――夏美の手を取って立ち上がらせると、またそうして丘を下っ

ていく。
登ったら下る。当たり前のことなんだ。そんな当たり前に気づいたことのない僕は、夏美の視界のことを本当に真剣に考えていたのだろうか疑問に思う。夏美が傍にいてくれると安心して、本当に信頼に甘えていたのは僕のほうだった。
だからこれからはちゃんと、下りも一緒に歩いていこうと思う。都合のいいところで会ってそれだけで満足していた自分も、それからこうして夏美の膝の上で泣いた自分も、全部受け入れられたらいいと思う。
夏美と一緒にであれば、本当に何でもできそうな気がするんだ。

つづく

6．必死な当たり前

初めて見た女の子の身体は、とても正視できるようなものじゃなかった。けれどそれは決して悪い意味ではなくて、もし許されるのなら何時間だって見ていたくなるような、それはそう、妖しげな魅力に彩られていた。

事実そのときは時間を忘れて見入っていた。照れながら、震えながらそれでも僕のすべてを受け入れようと耐えてくれた夏美は、同じようにして僕の身体をじっと見ていた。

快感というよりはずっと充足感といったほうがいい。夏美の身体を僕がその全身で貪っている間、僕はただひたすらに蕩けるような温度を胸に感じていた。夏美は痛がっていたけれどどうだったろう――

そうして夏見と僕は一つの区切りを迎え、男と女になったのだった。

――ぶらいんど・そんぐ――

サルトルのガールフレンドだという、ボーボアールという人がこんなことを言ったそうだ。いわく「人は女に生まれるのではない。女になるのだ」と。男に関しても同じように言われることが多い。

今までにそんなことを実感したことなど一度もなかったけれど、夏美と身体を重ねて一つだけ感じたことがあった。それは夏美――ひいては女性というものが感じているものと、僕ら男が感じているものが、ほとんど表裏を隔てるほどに違うということだ。女の人が感じているものの幾許かでも見、聞き、そして感じられれば、それは男として一つ成長したのだと思うことはできたのだった。

別に世界が変わるわけじゃない。童貞がそうでなくなって、処女がそうでなくなるだけの話なのだ。女性に関してはそりゃあ血を流したり痛みを感じたりはあるんだろうけど、夏美も特に何が変わったわけではないと言う。僕も夏美も、互いが互いを好きなまま、ただ知らなかった部分を知っただけ。そういう意味じゃあ、彼女の視力がじきになくなってしまうことを知ったときのほうが、世界はずっと大きく変わったのだ。

ただあえて言うなら、夏美がずっと近くにいるような感覚があった。あるいは誰にも見せたことのなかった夏美を僕にだけ見せてくれた――そこに芽生えるものがあるとしたら独占欲だ。

夏美が行為のあと開口一番言ったのが「ずっと忘れない」という言葉だった。僕はその言葉をこそずっと忘れずにいるのだと思う……きっとずっとだ。

今日は終業式。それを終えたら僕らの学校は冬休みに入り、この場所はほとんど人気のない閑散としたものになる。今はこれだけ賑やかなのに、ただの一日ですべてが変わってしまうのだ。

世界はそんなにも複雑なものじゃあないんだと思った。あの日丘

の上で見た世界がとても狭かったように、例えば視界の中を何かが埋めてしまえば、他のものなどさしたる意味を持たなくなってしまうのだ。だとしたら人の悩みなんてものはとてもちっぽけで、複雑化したのだといえるその根拠があるとしたら、きっと見えなかったものが見えるようになったというそれだけなのだと思う。例えばストレスという言葉が生まれる以前、ストレス性の病気がなかっただろうか――？

僕にはそれを断言できる知識なんてものはないけれど、それでも世界も社会も、決して理解できないままのものではないと思う。

「……ねえ舞、冬休みの間に、一度うちにおいでよ」

だから夏美のこの発言の意図も、決して複雑なものではないはずだ。

覚悟を決めればなんてことはない、社会は結構単純に出来ているのだから。

「僕もいつかはと思ってた。年末は忙しいだろうから、三が日明けたらいいかな」

「そうだね。じゃあ、きれいにして待ってなくちゃ」

「夏美の家が散らかってるとは思えないけど……楽しみにしとく」

丘を囲うように住宅街は広がっていて、僕と夏美の家は完全にそれを隔てて建っている。だから校門前で待ち合わせする程度のことしかできないけれど、あえて僕たちはそうしていた。「一緒に登校」なんてことに、まだワクワクできた自分に少し驚いている。

「夏美って一人っ子だった？」

「そうだよ。きょうだいがいたら、きっとこんなわがままじゃなかったよ」

「確かに……」

「……そこは否定してよ、彼氏として」

「否定できないよね……好意的にとっても」

「女のわがままは男の喜びですよ！　っていうのはどうだろう」

「あえて否定はしないけどそれってどうなの」

それにしても軽口を叩ける間柄でいられてよかったと思う。うれしいこと悲しいこと、何でも話すにしても、目のことや膝のことばかりじゃ気が滅入る。

元々夏美は、ネガティブでこそないものの、物事を重く見がちな人間だ。クラスメイトの軽口には自分なりに応じてみているだけ、決して心から楽しんではいないと言っていた。もちろん楽しくないわけじゃあないだろうけど、それは嘘というわけでもないはずだ。

だとしたら夏美が今こうして僕と交わす笑顔もまた偽者だろうか。けれど、どうしてかそれはないと断言できるような心地だった。これも身体を重ねたからなんだろうか。

「舞子ちゃんはすごくお兄ちゃん想いで、こんな妹なら欲しいかも」

「舞子は、まあそりゃ確かにそうかもしれないけど、気苦労も多いよ？」

「……そういうことを本人の前で言うのはどうかと思うよ」

そういえばそうだ、舞子が夏美の反対側、僕の左隣にいたことを忘れていた。

これはむしろ夏美の提案だった。意外なことに舞子のほうから遠慮したというのに、夏美はそれを聞き入れなかったのだ。彼女が言うには「全部納得の上で付き合いたい」とのことだ。

「早くも後悔してるんだけど」

「まあまあ、せっかくだから甘えとこうよ」

「恋人としての余裕を感じてすごく不愉快です」

舞子も元々自覚がなかったわけじゃあないんだと思う。それは親愛の履き違えという意味であって、彼女は決して僕に恋をしていたわけじゃあない。

だからこそ、今僕の傍にいる恋人という存在が少しばかり気に食わないというのもあるだろうか。僕だって、夏美という恋人がいても、舞子にもしも彼氏ができたのなら、少しは嫉妬に似たものを抱いてしまうのだと思う。

傍にいたものが、自分よりも近くに何かを置くということ。それ

は決して悪いことではないはずなのに、どこかに引っかかりを覚えてしまう。
「でも、お兄ちゃんが恋人とか想像もできなかったのになあ」
「そりゃあ、僕だって興味がなかったわけじゃないしさ」
「興味があったって、表に出さなきゃ誰も気づいてくれないんだよ」
「たった一人の妹なら！　とか思ってたりもする。自分でもどうかと思うけど」
「……そりゃあ、なんとなく、舞子も女だし、気づかなかったとは言わないけど」
舞子も女――その言葉にハッとする。
結構核心を突いた言葉だと思う。異性を意識するような間柄では決してない「妹」という生き物が、かといって女ではないなんてことは絶対に言えない。僕らがそれをタブーだと決めるのは、あるいは後天的に身についた常識やモラル……つまりそれを教え込む人間がいなければ発生しないものだ。
だとしたら、やはり女は女として生まれるのではなく、女になるのだと思う。人の「人らしさ」は、周囲の影響によって形成される。
僕らしさの根底に舞子がいる。あるいは今なら夏美だろうか。
「一緒に住んでてさ、なんかこう、着替えとかお風呂とかそういうハプニングってないの？　兄妹だとまあ、そういうのって全然気にならなくなるんだろうけど」
「あったようななかったような。お兄ちゃんの脚が治るまで舞子が色々お世話してたから、ほんとにどこか感覚が麻痺しちゃってるんですよね」
「色々お世話……なんだか淫靡な匂いがするよ」
舞子がそういった話題で茶化されるのを嫌うのもまた周囲があまりにしつこかったからだ。けれど夏美のその冗談に素直に笑えている辺り、決して舞子は夏美を嫌ってはいないのだとわかる。あるいは懐いてるといっていいくらいだ。
「お兄ちゃんたら恥ずかしがっちゃって、気にするな気にするの応

酬を毎日のように」
「脚、そんなに悪かったの？」
「移殖した腱がなじむまで大人しくしてろって言われたので」
「腱……移植？」
「あれ、お兄ちゃん言ってなかったんだ」
「いや、詳細はいらないかな、と」
走れないということだけわかってもらえれば――という言い訳が通用しないと、夏美の表情を見て初めて気づいた。なんてことだ、鈍いにも程があるだろう。夏美はちゃんとすべて話してくれたのに、どうして僕だけが話さずにいていいなんて思えたんだ。
ごめん、とだけ謝り、少しだけ息を整えてから話すことにした。場所は一棟と二棟の間の中庭、場所が場所だけに人気はほとんどない。ベンチに座った二人を芝生から見上げて、風が一度だけ流れていったのを確認してから、僕は静かに語り始める。
――本当は、何より舞子を巻き込んだ話になる、というのが気がかりだった。
「五年前……中学上がる少し前にね、舞子と僕、二人で事故に遭ったんだ」
「……うん」
「命は助かったけど舞子の脚がさ、ひどいことになっちゃって」
「もう歩けない、なんて言われました」
あのときは僕も痛かったはずだけど、あんまり覚えていない。舞子があまりにも悲しそうで不憫で、僕は幼いなりに兄として、妹を守らなくちゃと思ったからだった。だからあのとき気丈に振舞えたのも、あるいは舞子のおかげだ。
「特に腱の損傷が箇所も程度もひどくて、自家移植は望めないし、人工移植するにも少し無理がある……って言われて」
「……うん」
「人工移植もそんなに……うちも貧乏じゃないし、払えないほどお金がかかるってわけじゃないんだけどね、どうしてもそれじゃあ『

馴染まない』みたいなのはあるみたいで。ある程度は誰かから引っ張ってこなくちゃいけなかったんだけど……――なかったんだよ、舞子の体質に合う腱が、近隣病院まで探しても、どこにも。結構変わってる身体みたいでね」

「どうしても、どうにかなりませんか……って言ってくれたのが、お兄ちゃんだったんです」

あのときの両親は見ていられないほどだった、ということは覚えている。自分の子供がそんなことを言い出して平静でいられたほうがどうかしてる、とは思うけれど、その天秤の対にもまた自分の娘がいたとしたらどうだろうか。腱が切れたまま長い時間を放っておけば、次第にその状態に馴染んでしまう。

数週間はあるはずだった。時間は、長くないにしろ、ある程度はあったはずだ。けれど僕が下した決断を、両親はためらいながらも受け入れてしまった。

僕の脚の何箇所かの腱は今も人工のものだ。あまり頻繁には行かないが、その経過を確認するため、定期的に検診にも行っている。

「だから……舞子は『お兄ちゃんの代わりに走る』なんて言ってるんだよ」

「だってこの脚のいくらかはお兄ちゃんだもん。お兄ちゃんのために使われるべきだよ」

「……そういうことかあ。あるんだね、そういうことって」

あるんだよ、本当に、ドラマみたいなことって。

けれど美談となるようなことでもないし、それで感動なんてして欲しくないとも思う。例えばこれを物語にして、それを読んだ人間が何を思うだろう――そういうことを考えただけで、僕は舞子を狂おしいほどに愛しく思うのだ。

僕は舞子を受け入れながら生きてきた。代わりになると言うから代わりに走らせたことも多々あるし、男としてはどうかと思うけど、背負われて出かけたことだってある。父さんと母さんが「自分が」と言っても、舞子は頑として聞き入れなかったのだ。

だから舞子が傍にいないことなど考えたことすらなかった。もちろん「兄離れ」を勧めたことだってあるけれど、本心ではずっと僕の傍にいて欲しいなんて思ってたりしていたのだ。
「じゃあやっぱり、わたしは舞子ちゃんも一緒に、舞と幸せになりたいな」
「……」
「舞子ちゃんが舞に依存してるように、やっぱり舞も舞子ちゃんに依存してるんだよ。それに舞のために走ってくれる人がいるのなら、わたしは何だって利用したいと思っちゃうんだよ。だってわたしと舞だけじゃあ、支え合うにしてもバランスが悪いんだもの」
だから舞子は必要なんだ。
舞子もいずれ恋人を見つけ、あるいはそのまま家を出て嫁いでいくのかもしれない。そうしてたまに顔を見せるくらいの間柄になって、それぞれの生活に入っていくのだろうと思う。けれどどうだろう、舞子が僕の脚を忘れて生きること――それを想像するだけで寒くなる。
まだまだ子どもなんだと自嘲が浮かぶ。結局僕は、舞子を「許せていない」んだ。
「……お兄ちゃん」
「ん……大丈夫だよ、舞子のしたいようにすればいい」
けれどもそれもまた本心だ。
舞子の人生だ、好きなことをしている彼女の自然な笑顔を見ていたいとも思う。僕といるときの舞子が自然体でないこともないだろうけれど、きっと義務感とか使命感とか、そういったものに突き動かされている部分もあると思うのだ。
枯れ木を縫うように風が通り抜けると、舞子の尻尾がゆらりと揺れる。
「約束はできないけど」
僕も夏美も無言のままだ。
「わたしはお兄ちゃんの幸せが一番大事。だってお兄ちゃんの幸せ

の何割かはこれのせいで消えちゃったから、その何割かが、わたしの幸せの何より小さいなんてことあるはずがないから」
だからこそそれを聞いたときに反射的に舞子を引き寄せてしまった。ベンチからすべるようにして僕の懐に飛び込んできた舞子を受け止めて、「もういいよ」と呟いた。
だってそれは違う。いやきっと何も違うことはないんだろうけれど、それはやっぱりどこか違うんだ。
「僕はこの脚のおかげで舞子を近く感じてたと思ってる。それに、舞子が近くにいなければきっと僕は『どこにでもいる高校生』で、夏美とは釣り合えなかったと思うんだ」
「……舞」
悲しそうな声色も、それを否定してはいなかった。
「奪われたって舞子が言う、その幸せがどんなものか知らないけど、少なくとも今『幸せだ』って言える状況にあるんだからさ、舞子の幸せがどう釣り合ってるか、っていうのは少なくとも気にしちゃだめだよ。舞子の幸せはさ、舞子の幸せなんだから」
「お兄ちゃん……」
「美しい……」
「……」
兄妹のいい話に水を挟むのは誰だ、って、まあ夏美だけども。
「あはは……まあ、結論は出ました！　だからいいじゃない」
「そんな簡単なものかなあ……」
「簡単じゃないからこそだよ。そういうときはね、結論ありきでもいいんだよ」
そうして明るく手を叩く夏美を見てちょっと小憎らしく思うと同時、どうしたってこの人には敵わないなあと思う。
そうとも、結論ありきでいいじゃないか。こうこういう結論にたどり着きたいから僕らはこうして論述していく――がんばっていくんだ、って、そう思えるなら何よりじゃないか。結論を急ぐのは確かに賢くはないんだろうけど、あれこれ考えすぎて結論が出せ

ないのは論外だ。僕はそうして今まで何度も失敗してきたじゃないか。
舞子が少しぐずりながら僕の胸に顔をこすりつけた。
「クラスメイトが見たら卒倒しそうな光景だね」
「お兄ちゃんの意地悪」
「そうとも。だからしばらく離してあげない」
「……いじわる」
随分とスキンシップの過剰な兄妹だな、という自覚は昔からちゃんとあったんだ。けれどもそれをからかわれても茶化されても、まったく改めようという気が起きなかった。なぜだろうなぜだろうと考えた先、いつも行き着く答えが「舞子はかわいいから」だ。
かわいい、と言うとたぶんクラスの何割かは「違う」って言うだろうと思う。けれど僕にとって舞子は「妹」で、誰より傍にいた女の子でもあり、また誰よりもその内実をしっている人でもある。言えないことなんてなかったし、聞けないことなんてなかった。たぶんそれすらもこの脚のおかげではあるんだろうけれど、とにもかくにもお兄ちゃん子な舞子は、こうして抱いていると小さくて温かくて、とてもかわいらしい生き物だなあと思うのだ。
「昔から泣くとこうしてたっけね」
「昔は泣き虫だったね」
「今もね。でもいつからだろう、僕と大して身長変わらなくなった」
「脚がね……細くなって鍛えられなくなって、伸びにくくなるって。身体が無理に成長しちゃうと“歪”になるって、だから……」
「ふーん……夏美、どう思う？」
「んー……いいんじゃないかな、舞、童顔だし」
「……それは実に嫌な慰めだね」
そもそも慰めになってない、という突っ込みはなしだろうと自制しておく。
とはいえそれを舞子が悔やむ必要もなければ、負い目を感じる必要もない。僕は思うんだ、「普通」でなくてよかったって。

普通ってなんだろうと言う人がいる。同性愛や身体障害、その他諸々の事情を抱えた人たちがそうした言葉に反応するのをテレビで見たことがある。けれど僕もまた普通であったことがある人間であり、今も走れない程度でさして困ったこともない人間ではある――が、決して普通ではないという自覚があった。

普通って何だろう。それは世間一般に違和感なく溶け込めることを言うんだ。それ以上でもそれ以下でもない。他者と共有できる価値観だからこそ普通というのであって、それが多少なりとも阻害される以上はもう普通ではありえない。そこに議論をはさむ余地もない。

だからして僕は普通じゃない。夏美も。それでいいじゃないか。“普通”の人たちが好きな者同士でコミュニティを築くように、普通でない僕らもこうしてコミュニティを作って仲良くやっている――それだけのことに、なぜ目くじらを立てる必要があるというんだ。

そりゃあ僕には重症の人の気持ちもわからないし、社会に出て苦労を実感してるわけでもない。そして夏美はこれからどんどんとそれらを味わっていくことになるんだろう……それでも、普通の人たちがそれでも嫌いな人と付き合っていくように、僕らもまたそうして“普通”に溶け込んでいけるはずなのだ。今も夏美がしているようにだ。

それにそうして築く絆の中にも普通はある。舞子のようないい子が、きっとそういう橋渡しに成ってくれるんだろうと思う。

「舞子はかわいいね」

「……一つしか変わらないのに」

「いやー、昔からお兄ちゃんお兄ちゃんと後ろをついてくる子でね」

「へえー。かわいいねぇ」

「だからなんで自慢話みたいにしてるのっ」

かわいいかわいい妹は、腕の中で僕を見上げて憤慨の様子だ。これも言うなら普通じゃないんだろうか、ここまでのブラコンは。怒っていても離れようとはしない。

そんな風に思ってにやにやとする僕に気づいた舞子は、一瞬また声を上げようとして、すぐに落ち着いた。
「だって、……あったかいもん」
「うわあ……やばいね、ほんとにかわいいね」
「でしょ？　舞子なだめるときはとりあえずスキンシップだったよ、昔っから」
「だから……！　……もう、いい」
大きくなっても本当に変わらない——ちゃんと舞子が「妹」であってくれたことに安堵した。こうは言いたくないけれど、正直なところ彼女の気持ちは少し量りかねていたところもあったんだ。ただの兄にこうも心許せるものだろうか、ってね。
けれど僕を見上げる——胸に抱かれる彼女に色情はない。それで十分だった。
「変わってないのはお兄ちゃんもだよ。なだめるときはいつもこうだもん」
「お兄ちゃんだからね、妹のことは大体わかるんだよ」
「……敵わないなあ」
「勝ち負けじゃないよ。舞子はそれでも僕を引っ張ってきてくれたんだから」
「……そんな」
否定しようとする舞子を視線で留める。妹だからして、兄の言いたいことは大体わかってしまうらしい。
だからこそ、と思う。だからこそ——
「今までありがとうね」
「——！」
そう言ってしまうことに違和感はなかった。
思えば無常な生き方をしていたんだと思う。何も変わらないよう、ただ安穏と過ごすことを目標に、色々と移ろってきたんだ。万物は流転する、なんて言ったのは誰だったろうか。停滞すると光は目に届かない——人の生が輝いていると形容するならば、止まっている

ことなど「ありえない」――どうしたって僕らの目には僕らは映っているのだ。
愛の反意は無関心であると言う。つまりまあ、そういうことだった。
「見ててくれて、ね」
「あ、当たり前だよぉっ……！」
そうとも、僕らは兄妹だからして、目を背けることなどできないのだ。
現状に甘んずる――という言葉を今ほど憎める状況は他にないと思う。いいや、甘えが悪いものだという人がいるならば、僕はそいつを思い切り罵ってやれると思う。当たり前に胡坐をかくのは誰しも同じ。僕らのような普通でない人間から見れば、僕らを阻害する人間こそが「普通」に胡坐をかいているようにしか見えないんだから。
涙もろいことだ、思う。せめてまじまじと見ることだけはすまいと空を見上げると、いつのまにか立ち上がっていた夏美の笑顔が目に映った。無関心でいられるわけ、ないよなあ。
「もう、あなたたちの全身も見えないや」
「はは……涙もろいことだよね」
「……もう」
彼女の目は日に日に縮まっていく。もう二年もしないうちに僕の目をすら捉えることはできなくなるんだろう。
――正直なところ、僕にはやっぱり理解はできても、実感なんてものとは程遠いんだと思う。あの日丘で泣いたように、彼女の気持ちを少しでも共有してやることしかできやしないのだ。
やっぱり、それでも歩いていかなくちゃならないなら、僕は彼女の目でありたいと思う。そのために色々と盲導について学んでいるつもりだ。“足りない”ものを補っていく……酷く不安になる響きだけれど、それはやっぱり普通の人たちにとっても必要なプロセスであるはず。誰でもその上に胡坐をかく「当たり前」を、僕らは人

より少しばかり必死にこなしていく必要がある、ただそれだけのはずだ。
社会は割に単純にできているものだ。生き辛い人間には、生き辛い人間に向けたコミュニティが存在するように。
「……行こうか。遅刻しちゃうよ」
「うん。夏美さん、お兄ちゃんをよろしくお願いします」
「お願いされます。二人にもお願いするけどね」
「望むところだとも」
「……がんばります」

7．（大人になんてならなくても）

しゃらんしゃらんと鐘が鳴る。静かな午後に歌が響く。今日はクリスマス・イヴ。恋人達の特別な夜――とはいったものの、僕らにそういうロマンチックは少しばかり似つかわしくなかった。何しろ僕の家のこたつの上、ぐでっと妹まで交えてだべってるのが僕らだったから。

これはこれでいいもんだ……恋人宅のリビング、緊張の欠片もない夏美を見て、くすりと微笑んでみる。

――ぶらいんど・そんぐ――

さりとて恋人が実家に来ている、という状況にいささか期待も緊張もしてしまうのが男の性だ。夏美のほうは腹をくくって……というよりは既に全部を受け入れてしまって、こたつの上でとろけているようだけど、今日だって夜になれば当たり前に両親は帰ってくる。当然、夏美もそのときに帰ってるなんてことはないだろう。というより、今日夏美は僕の両親に会いに来た。彼女の家には三が日明けに行くつもりだけど、僕の家はそんなことをさして気にしないから、夏美の提案に乗る形で僕と舞子がそろって招待したのだ。

言うつもりなのだ。「こんな私ですけれど、どうか受け入れてください」と。あえて「こんな私」と、自らを貶めてみせるのだ。ただ一人の人間として僕のことを好きでいてくれると、その上で言ってくれる。

そんな悲痛な覚悟をして尚、こんなふうに安らかでいられる夏美を眩しく思う。大丈夫、舞子という強い味方はいるし、僕だって反対されれば説得には全力を尽くそう。

今はひたすらにまったりしていたい。穏やかに過ごしていたい。

「みかん、お兄ちゃん、はい」

「ありがと。しかし色気のかけらもないね、僕らは」

「いいんじゃないかな。色気は夜に出せば」

「……そういうことを妹の前で言わないでください」

「あはは、舞子ちゃんには早かったかな」

「早いも遅いもありません。そのときがきたら、それがあるべきときです」

……随分達観したことを言う妹だ。

ある程度積極的になれなければ恋って成立しないものじゃないかな、と最近思う。僕は決して積極的に夏美に近づいたりはしなかったけれど、それに対して夏美はめげることなく傍にいてくれたんだ。久々に会った僕が彼女を覚えていなくて、冷たいとは言わないまで

も、少しそっけない態度で、どう思っただろうか。強いな、と思う。
けれどどうだろう、そうして舞子が現状を受け入れてくれているのは、とても励みになる。「今のままでいいんだ」――どんなに心強い言葉だろう。向上心、克己心、ああとても大事だと思うよ、けれど……それをもたない人間を「悪」と謗るのは、それこそ狭量でしかないとも思う。
平穏な人生を望む人間もいる。向上心はもたなくちゃ仕事はできないかもしれない、でも出世なんてしなくていいじゃないか――それは矛盾した思考だろうか。僕はまだ子どもだから何もわかってないんだろうか。
舞子の言動を笑う夏美に陰はない。今を楽しんでいる。子どもの証だ。
「まず兄離れからかなあ。できそうにない？」
「下のお世話はしなくなりました。それで納得できないのなら彼氏なんていりません」
「……重症だね、舞」
「まったくだね。まあ一緒に寝ることも最近はないし、大丈夫でしょ」
「……こっちも重症だ」
そもそもひどかったのは脚を悪くした当初くらいで、ほんの半年もすれば生活に関して困ることはなくなった。ひどかったといってももちろん寝たきりでもなければせいぜいリハビリを必要とする程度であって、「下の世話」が必要だとは、今考えてみるととても思えない。
……けれどだからこそ思う。僕らにはそれが必要だった。世話をし、世話をされ、互いが互いを必要とするその状況が、当時打ちひしがれた僕らには絶対的な……そう、よりどころになっていたんだと思う。そうしなくては僕は舞子への感情を制御し切れなかった、そうしてなくては舞子は罪悪感に押しつぶされていた。
そういうことなんだ。だから今それから多少なり解き放たれると

いうことは、いやまさにそれを含めて「事故」、そしてその経過、ひとつのプロセスだったんだろう。
僕らは事故に関する問題を片付けた。そういうことになる。
「……妬きますか？」
「露骨に言うね。じゃあ私も露骨に言っちゃおう」
一拍置く間に舞子がつばを飲み込む音が聞こえた。
「今すぐにでも舞をうちに連れ帰りたいくらい。妹だってわかってても、恋人が他の女の子にそうやって肌をさらしてると思うと、ちょっとつらい。一人っ子だからかな」
「今はないですけど。お兄ちゃん、お風呂上がりにちょっと汗を引かせるためーとかもしないから」
「んー……小学校のころ、と思えばいいのかなあ。やだなあ、嫉妬とか、こんな感じなんだね」
以前夏美は「喧嘩なんてしない。舞の周りにある全部を好きになりたい」と言っていた。それはきっとその言葉を相反するものであることは、間違いないだろうと思う。ただそれをして思う――夏美の言うとおり、「嫉妬してくれる」ということにいくばくかでも喜びを感じるんだ。そしてまた言うとおり、そんなどこか余裕ぶった自分に嫌気が差すのもまた確かだった。
僕の一歩前を、いつも歩いている。夏美は色々なものを犠牲にしながら、その内側にあるものを大切に育んできた。だからきっと夏美は子供であると同時に、そこらの「おとな」よりも、ずっと「おとな」でもあるんだ。
「でも、今は夏美さん以外はありえないと思います。お兄ちゃんを好きになって、お兄ちゃんに好かれる人って、たぶん夏美さんだけだと思います」
「……どうしてかな？」
「いないんですよ。何かを捨てることに、気づける人って。そういう人って、どこかいびつ」
「うん、いびつ……は、そのとおりだろうね。でもね、気付いてる

というか、気付かざるを得なかったんだよ。だって、今も舞子ちゃん、あなたの顔がやっとぼやけて見えるくらい」
「お兄ちゃんが何を捨ててそこにいるのか、気づいてあげられる人」
「それは、わかってるふりをしてるだけかも」
「そのふりにお兄ちゃんが何かを感じる……そういうことが大事なんだと、思います」
「夏美、僕は夏美よりもずっとそういう捨てるものが少ないと思う」
そうとも、夏美はその世界から色を失くす。それは意味とか意義とかそういうことじゃなくて、ただ単純に色彩という感覚だ。いやだからこそ、単純だからこそそこには真実がある。多々ある真実の中からひとつでも捨てていくというのなら、それは想像を絶するような空虚であるに違いない。
けれどそちらじゃない、意味とか意義とかいう類の「色」というのなら別だ。そうとも、夏美を目の前にして空がどれだけ覆われようとも、そこから空が消えるわけじゃない。
――世界は広いんだ。
僕はきっとそうやって、一瞬一瞬で世界を伸ばしたり縮めたりして生きていくんだろう。この広い広い「世界」の中の、とても小さな僕の周囲も、それはそれできっと「僕の世界」であることに間違いはないんだから。
あるいは社会。だからこそ世界。多くの価値観が存在する国際社会の中に、資本主義経済と民主主義を旨とする日本社会があって、その中に僕の住む街という地域社会があって、さらにそこには僕の家族という家族社会が存在する。大仰に語られる「世界」なんてものも同じだ、自身がそうして大仰に捉えているから、他人が語る「世界」も端から大仰なものだと誤読してしまうんだ。
「……舞？」
「……だからね、夏美。ずっと近くにいよう。捨てたものにちゃんと気づけるように、ゆっくりと」
「……うん」

「わかるんだよ、きっと近くにいたら。だってそこが自分の世界なんだから」
「うん、見える。舞が見えるね」
鼻を突き合わせるほどの距離にいたら、今は夏美は僕を見ることができる。物理的という意味でならそれもいつしかできなくなるけれど、左右を見た記憶で全視界を補完できるよう、彼女はそれを覚えていてくれる。僕が変われば記憶とは違ったものになるんだろうけれど、だからこそ僕らは近くにいようと思うんだ。
舞子の手前キスは我慢しておいた。きっとそれも舞子にはばれているんだろうけど、彼女はそれで腹を立てたりはしなかった。
「いちいち確認しなくてもさ、そこにいるってわかるくらい、そばにいたいね」
「いるよ。ずっと」
「視界が少しずつなくなってくるとね、音が大きくなってくるんだよ。舞の息遣いがとっても温かくなるんだよ。触れるものをとても大きく感じるの。風の向き、湿度とか、そういうのにどんどん敏感になってきて、舞の肌の少し荒れたところまでわかっちゃう」
「お兄ちゃんのお肌、きれいなのに」
「わたしはもうすぐ何も見えなくなる。それは絶対にこの社会で生きていくのが難しくなることだよ。おじさまとおばさまに会う前にもう一度、わたしじゃなくて、舞に確認しておきたいな」
「……うん」
問われる内容はもうわかっている。
――それを背負う覚悟はあるか。
まだ年若い。社会を知らない。お金の稼ぎ方も知らない。介助の仕方もまだまだ知らないことだらけだ。そしてなにより、実際に夏美は、まだ視力をなくしたわけじゃあない。
それでも夏美は訊いてくる。穏やかな顔で、そのすべてを受け入れようと。
「一緒にいて、くれますか」

だから僕はそれでも答える。
年若いからなんだと言うんだ。未来を測れないのは大人も同じだ。社会を知らないからなんだと言うんだ。僕らを抜きに語る社会に意味なんてないはずだ。お金の稼ぎ方はこれから学ぶ。学ぶ機会と時間と、それから意欲は有り余るほどだ。介助の仕方だって同じ。これから夏美が視力をなくしたときのためにそれをするのだから、その時が来たら、それを活かす時が来たということだ。全力を尽くそうじゃないか。
そういう、ただそれだけのことなんだ。きっと実感の伴わない理解にも意味はないんだろうけれど、誰だっていつかわからないものに遭遇する。わからないからといって引き返すのだろうか。例えばそれが「今」大事なものだとして、その先を見ずに諦められるものだろうか。
決まってるじゃないか。
「そばにいるよ。僕に心がある限り」
そして夏美はその答えを予想していたかのように微笑む。
「ありがと。うれしいよ」
僕はそれをとても美しいと思う。
たぶん、おそらく、それはきっと覚悟なんてものではないんだろう。収入はなく、人付き合いがうまいわけでもなく、これといったコネがあるわけでもない。そんな僕の言葉は、ほとんどの大人が聞けばさぞ空虚に響くことだろう。それくらいのことはわかっている。
けれどそれも納得の上だ。先に言ったように、社会は僕らを切り捨てることなどできないし、であれば僕らも社会から逃げることなどできはしない。何も社会に対して「僕らを助けろ」と言っているわけじゃない。そこまで高慢にもなれない。でもそこに生きる以上、そこに紛れてしまう以上、やっぱり僕は僕を主張していたい。
僕は賢しいふりをしたただ臆病な人間だ。僕は運動ができない。元々そうであったし、そういう身体になってしまった。僕はけれど学力には自信がある。僕は人間関係に不器用で、友達と呼べる友達

は片手で数えるほどだ。そういうふうだから卑屈に育った自覚がある。同じくらいに賢しく賢く不器用で臆病な妹の舞子がいる。かわいい妹だ。そして何より、すべてを差し置いても、僕は音が好きだ。きれいな音が大好きだ。――夏美の声が、好きだ。

譲れやしない。これ以上の音なんてないと、もうずっと前から思い続けている。その僕の言葉が、ただ一時の熱病などと誰にも言わせはしない。

「好きだよ、夏美」

だから胸を張って言えるんだ。彼女と手を繋いで、吐息を感じる距離に目を合わせ、逸らすことなく言えるんだ。

彼女は何を想い、覚悟ともいえない「納得」を感じ、それを口にするんだろう。

美しい声で。僕の何より好きなその音で。僕の何より好きな、その言葉を。

「私も。好きだよ、舞」

ああ――まさに絶頂だ。

僕は音楽史を勉強したことなんてない。音楽記号さえ基本的なものしか知らない。けれど音に対しての感動というのは、学を重ねようが歳を重ねようが、たとえ何があったって差別なんてなくて、それはすごくプリミティブであると思うのだ。

それこそ、絶頂だと思う。

「ずっと離さないでくださいね。お兄ちゃんも、夏美さんも」

万感の思いを込めたらそれは何だって――あるいは美辞麗句も意味をもたないやもしれない。美しい日本語に感動することはあってもそれはひどく理知的、というよりは文化的な……僕らの感動とは違ったもののような気がする。

僕らの言葉も舞子のそれも幼いものなのに、こうして感動ができる。それはやっぱり、その音だからこそだ。

僕の男らしくない小さめの声。舞子の高く澄んだ、あるいは少し冷ややかな声。そして夏美の暖かい、僕の始まりの声。

それこそだ。見えない荒波を想像しても、もうすぐ来る重苦しい時間も、夏美のこれからだって、全部大したものでないと思えてしまうような、心強い高揚感。それを促してくれる。もちろん大したものでないと本当に思っているわけじゃあないけれど、本当にそれらに喜んで飛び込んでしまえそうなほど、僕らを高めてくれるもの。

僕らは同じ姿勢のまま、くすぐったく笑った。幼く、弱く、もろく、けれどそれはきっと、純粋なものであっただろうと思う。

僕の両親はごく普通のそれであると思う。ただ多少子煩悩である。

僕らの事故のエピソードはあまり他人には知られていないが、実は地方紙の隅っこに載ったこともある「美談」だ。当人がまったくそれを意識していないということもあるが、それはまったくどうでもいい。

つまるところ彼らは、必要もないのに僕らに対し「罪悪感」なるものを抱いていた。それを口にしたりはしないが僕らも人の子だ、それくらい長年彼らを見ていたら理解できる。舞子もそれをわかっている。

一度だけ言ったことがあった。舞子とそろって両親の部屋を訪ねて、「そんなふうに申し訳なさそうな顔をしないで。二人は何も悪くないじゃないか」と。それに対しての両親の言葉がこれだ。

「俺たちは君らに取り返しのことをつかないことをした。避けられた事態を、手をこまねいて受け入れてしまった。それがただの『善人』であったらよかったかもしれないが、俺たちは君らの親だ。親は君らのすべてを負う義務がある。だからな、舞が舞子に感じてる申し訳なさや、舞子が舞に感じてる申し訳なさも、俺たちは背負っていかなくちゃならないのさ。君らがそれを重荷に思うならこれからは気をつけよう。けれどこれは一生消えることはないし、きっとうっとうしいと思うくらい君らに構いたがるだろうと思う。だから許して欲しい。俺たちの怠慢も、これからのわがままも。母さんも同じ気持ちだ」

正直なところ確かに重荷だ。今も背に感じている。

けれど、この言葉を聴いて、どうして「許した」と言えるだろう。だってそうだとも、舞子も僕も、最初から何も両親を責めてなんていない。

両親が洗いざらい話してくれたから、僕らも全部話した。舞子の過剰な介助も、僕の依存も、それぞれお互いを意識したもので、最初から両親のことは思っていない。責めてもないし、かといってその当時の状況でありがたいとも思っていない。

彼らは「それでいい」と言った。だから僕らはそれを「ありがた

い」と言った。
そうして彼らの“わがまま”は体現され、できあがった子煩悩だった。
だからこそ彼らは夏美に対し厳しい視線を向ける。それが守るためであると知っているから。僕らもそれを理解しているから。
「正直なところ、私たちは諸手を挙げて賛成することなんてとてもできません」
……わかっていたとも。すべてうまくいくはずないことくらい。
「あなたたちはきっと何もわかっていない。何しろまだまだ子どもですから」
聞きなれない父さんの口調に冷感を覚えるのは立場の違いによるものだろうか。冷たい親だと無意識に思ってしまっているのだろうか。わかっているのに。
「私にも障がい者の知り合いはおります。彼は妻帯者であり、一人の子どもを養う父親の立場でもあります。彼の奥様に一度お会いしましたが、非常に気丈な女性であるという印象でしたね。大人しい気性ではありましたが、一本筋の通った人物でした。……愚息にそこまでの器はないと、わが子ながら思っております」
言い返せない。そういう生き方をしてこなかったから。それが突然一人の女性のためと言って、誰が信じてくれるだろうか。
虫のいい話だったろうか。
「ですので、あなたを支えていくのは、難しいと思います」
「支え合うというのも難しい、ということは、夏美さん、あなたが一番よく知っていますね？」
続けての両親の言葉だ。
夏美はうつむいて口を開閉しているが、肝心の言葉が出てこないようだった。
これが両親の愛情だというのはわかっている。僕が強い生き方をしていたらこうは言われなかったはずだ。差別なんてものでないことくらい、夏美だってわかっている。

けれど、譲れない。
「できない、ということはないよね。父さんも母さんも、そう思ってないからそういう言い方をしてる」
「……揚げ足を取るような指摘で逃げるな、舞」
「揚げ足を取ってるわけじゃない。父さん、僕は父さんの息子なんだよ」
「だからなんだ。だからすべて飲み込み交際を認めろというつもりか」
譲れないけれど、いやだからこそ、僕はこうするしかない。
こたつから数歩離れたテーブルの席についていた僕は、そこから立ち一歩ずれ、対面に座る両親の脇でひざまずく。床に指をつき、額を当て、今まで出したこともないような音を張り上げる。
それくらいしか、できることがない。
「強くなりたいんです。彼女のすべてを背負っても、この壊れた膝のままでも、立って……いいや、歩いていけるくらいに」
「……」言葉はない。わかっている。
「まず大学は出ます。一流と呼ばれるところにだって、今までの努力にこれからのそれを重ねたら行けるはずです」
これは両親から言われたことでもあるし、夏美と生きていくと決めたからなおいっそう「自覚」として根付いたことでもある。
甘えというなら言うといい。これは必要なことだ。
「介助の勉強もします。……少し前から始めています。お医者さんやボランティアの人たちからの話も、膝の検診の折に少しずつ聞いて」
これは舞子にも夏美にも内緒にしていた。
内緒はやめようと誓っていたけど、これくらいは許して欲しい。
それにしても、頭を下げていると不安になる。姿が見えない、表情が見えない、声もなく、背に応援もない。まるで独りであるかのようだ。
――いいや、僕は今、間違いなく独りなのだ。

両親は僕らの仲を応援しようとはしていない。夏美も今は僕を値踏みしているはずだ。舞子だってこの状況で声を上げるほど不躾じゃあないし、様子見の意味合いが大きいだろう。
僕は今、正しく独り立ちできるか見られている。その見込みがあるかどうか、だ。
頭を上げ、言葉を繋げた。
「あなた方には、これからも甘えさせていただくことにはなります。けれど今までのようにおんぶ抱っこになるつもりもありません。ただ、手を引いてもらいたいと、そう思うようになりました」
「僕はその手をとって、自分の足で歩きます。自分の意思で、自分の目的を持って、自分のために歩きます。舞子のためにただ生きていただけの自分も、両親への期待に応えようという自分も、捨てるわけじゃなく、ただ脇に置かせていただきます」
「僕は僕のために歩きます。その傍らに夏美の手をとって、あわよくば背負って生きたいと思っています。なので――」
一度言葉を切る。
独りでないことを知る。
「今しばらく、甘えさせていただけませんか」
言葉はこれで終わりだ。正しく響いただろうか。気にしても仕方ない、もう一度深く、額を床にこするつもりで頭を下げた。
彼女の家に結婚を申し込む男というのは、みんなこれくらいのことをしているんだろうか。みんな相応の収入と地位と覚悟とをきちんと用意していくんだろう。あるいはそれは武装ともいえる。
生身のまま戦いを挑む僕はさぞかしこっけいだろう。きっと笑いものだ。
けれど僕は笑わない。たとえ相手が自分の両親だろうが、退くつもりなんて毛頭ない。
どれくらい時間がたっただろうか。時間なんて気にしている余裕

がないから、あるいはどうでもいいけれど……
足の痺れが少し、というところで上から声がかかった。温い女性の声。母さんの声。
「舞、膝によくないわ、立ちなさい」
「立てません」
「……仕方のない子ね、まったく、誰に似たんだか」
あなただと思います。せっかくの美人が、真面目だけがとりえの男に惚れ込んで、「普通の家庭」におさまることを譲らなかった頑固さを。
「まったく、な。誰に似たんだか」
あなただと思います。真面目だけがとりえで、ただその一途とひたむきさで、指折りの美人を射止めた誠実さ。
自信がある。今までふらふらと生きてきたけれど、ただ一つに向けて歩いていくそれだけは。音にも舞子にもそうだ、そこに対してふらふらしたことは一度もないとはっきりと言える。
「立ちなさい、舞」と今度は父さん。
「それと敬語はやめなさい、似合ってないから」
「ひどいな」
「ふふ、でもそうよ、似合ってないわね」
まったくそろって……立ち上がると、両親は笑っている。音が聞こえる。
そうして両親は再び夏美に向き直ると、僕がしたように頭を下げたのだ。夏美は身をすくめてそれを受け入れ、その頭を見つめた。
「このとおり、どうも見込み違いで、愚息は大人になろうとしているようです」
「子どもではありますが。懸命になっています」
「どうか、支えてやってください」
「よろしくお願いします」
そしてどうしていいかわからないかのように一度だけ僕を見、すぐに思い直した。

――やはり強い女性だと思う。僕の数歩先を、いつも歩いている。きっと僕が頭を下げているころには、そうするつもりだったんだろう。僕の言葉を最後まで聞き届けると決めてくれていたんだろう。

「こちらこそ、まだお手を煩わせることもあるでしょうが、何卒よろしくお願いいたします」

硬い言葉ではあったけれど、それこそ「万感」を込めた言葉だとわかった。

頭を上げ、同じように両親を笑いあうその様子は、本当に通じ合っているようだったから。大人同士の顔をしていたから。

さておき。

僕の言葉に対して両親はこう付け加えた。

「何も急いで大人になる必要はない。いいや、大人になる必要がないと言い換えてもいいくらいだ。大事なのは健全に生きることであって、理知や分別・経験に生きることじゃない。自分の人生は自分に捧げなさい。自分の捧げたいものに捧げなさい。歩かなくともその場に踏ん張るという生き方もある、ということをしっかりと覚えておきなさい」

「夏美さんもね。今のうちから色々と飲み込んでしまわないで、吐き出すことも覚えておかないと。大人になるって、お酒を飲むことに似ているのよ。……あなたたちにはわかりづらい例えで申し訳ないけれどね、飲めば飲むほど酔っ払って、鈍くなって、それが快い人もいるけれど、いずれ中毒になってしまうの。だからしっかりと酔いを抜く術と、飲めない人を馬鹿にしたりしない心を持っていなくちゃいけないの。知ってる？　一番いい酔い覚ましは、吐いちゃうことなのよ」

僕らにはまだよくわからない話ではあったけれど、夏美は母さんの笑い話に同調するよう笑って頷いた。

わからないながら、せいぜい美酒に酔いたいものだ、と思う。

そうとも桜の木の下にシートを敷いて、ゆっくりと酔いを楽しむんだ。
乾杯を交わす人たちがそこにいたらなあ――と、僕は未来を想像して笑う。
だからこのすべての話に一言だけ、色々なものを込めて返す――。
――「ありがとう」

つづく。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7414g/

ぶらいんど・そんぐ

2011年10月11日08時53分発行